

禪門寶藏録卷下

君臣崇信門

海東沙門 天頌撰

〔五一〕西天異見王

西天異見王、輕毀三寶。問波羅提尊者曰、何者是佛。答、見性是佛。王曰、師見性否。曰、我見佛性。云、性在何處。曰、性在作用。云、是何作用、我今不見。曰、今現作用、王自不見。云、於我有否。曰、王若作用、無有不是、王若不用、體亦難見。云、若當用時、幾處出現。曰、若出現時、當有其八。云、其八出現、當爲我說。波羅提即說偈曰、在胎爲身、處世名人。在眼曰見、在耳曰聞。在鼻辨香、在舌談論。在手執捉、在足運奔。遍現俱該沙界、收攝在一微塵。識者知是佛性、不識喚作精魂。王聞偈已、心即開悟。

傳燈録

*

西天の異見王、三寶を輕毀し、波羅提尊者に問うて曰く、「何者か是れ佛」。答う、「見性のものはれ佛なり」。王曰く、「師は見性するや」。曰く、「我は佛性を見る」。云く、「性は何處に在るや」。曰く、「性は作用に在り」。云く、「是れ何の作用ぞ、我れ今見ず」。曰く、「今現に作用す、王自ら見ず」。云く、「我に有るや」。曰く、「王若し作用せば、不是有る無し、王若し用いずんば、體も亦た見難し」。云く、「若し用いる時に當つては、幾處に出現すや」。曰く、「若し出現する時は、當に其れ八有るべし」。云く、「其の八の出現、當に我が爲に説くべし」。

波羅提即ち偈を説いて曰く、「胎に在りては身と爲り、世に處りては人と名づく。眼に在りては見と曰い、耳に在りては聞と曰う。鼻に在りては香を辨ぎ、舌に在りては談論す。手に在りては執捉し、足に在りては運奔す。遍現して俱に沙界そなわに該り、收攝せば一微塵に在り。識る者は是れ佛性なるを知り、識らざるものは喚んで精魂と作す」。王、偈を聞き已り、心即ち開悟す。

傳燈錄

*

インドの異見王は、三宝をないがしろにした後、ハラダイ尊者にきいた、どんな奴が仏か。

答え、見性の人（自己を見つけた男）が仏だ。

王 師は、見性したのか。

者 私は仏としての自己を見つけた。

王 （仏としての）自己とは、何が証拠ぞ。

者 仏としての自己は、（私の）活動が証拠。

王 何が活動か、私にはとんと見えぬ。

者 今（王様の目の前で）活動しておりますのに、王様は見ようとなさらん。

王 私にも有るのか。

者 王様が活動させたら、王様ならざるなし、王様が活動させなければ、（王の）正体は拜めません。

王 （私が）もし活動させた場合、幾ヶ所に姿をみせるであろうな。

者 （王様が）もし姿をお出しになると、まちがいなく八つの姿があります。

王 その八つに見える姿を、どうか私に説いてくれ。

ハラダイはそこで、偈を説いた。

母の胎の中では身、体外に生れ出ると人間。

眼の証拠は見えること、耳の証拠は聞えること。

鼻の証拠は、匂いをかぐこと、舌の証拠はしゃべること。

手の証拠は、(ものを)つかむこと、足の証拠は、歩きまわること。

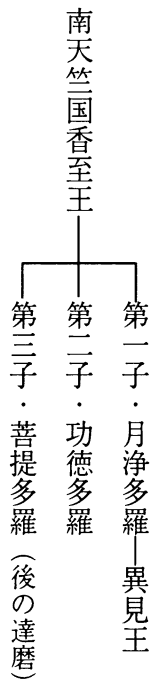
はてもなく姿をあらわして、大千沙界にひろがるが、少くまるめこむと、一つぶの塵が証拠だ。

それが誰か見識った人は、仏としての自己と判るが、相手を識らぬ人は、ばけものだと呼ぶ。

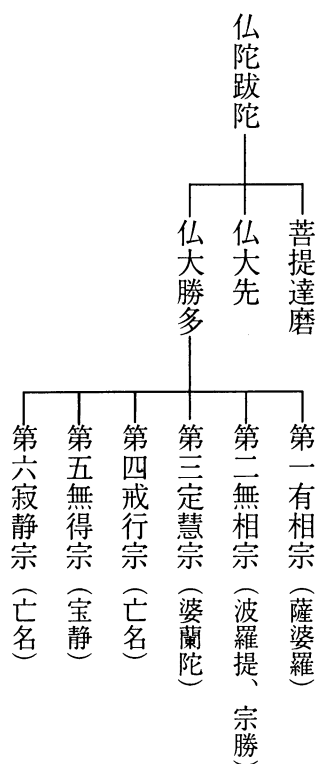
王は偈をきいて、忽ち悟りをひらいた。

*

○異見王 南天竺三国香至王の第一子である月浄多羅の子。父を継いで国王となる。達磨は叔父に当る。即位の初め、「我が祖先は皆な佛道を信じ、邪見に陥ち、寿年永からず、運祚も亦た促しみじか」と言って仏教を迫害したが、達磨のはからいによって波羅提尊者が遣わされ、その教化によって仏法に帰依した。



○波羅提尊者Ⅱ達磨がまだ西天にいたとき、六宗（第一有相宗、第二無相宗、第三定慧宗、第四戒行宗、第五無得宗、第六寂靜宗）を論破したが、その第二無相宗の宗主が波羅提であり、達磨の弟子となった。



六宗を論破したという話は、『祖堂集』にはないが、『伝灯録』『天聖伝灯録』『伝法正宗記』に見られる。もとは『宝林伝』巻七（現欠）に於て新しく付加された物語である。その禅宗史的意義については、『初期禅宗史書の研究』第五章第五節「『宝林伝』の世界」に詳しい。

○見性は佛Ⅱ「見性の当体が仏である」。この見性は「仏性を見る」の省略形ではなく、見性という一つの述語に熟しており、「見性成仏」よりも一層進んだ頓悟的表現となっている。『血脉論』、「見性即是佛」（Z一〇一四〇六d）。

○性在作用Ⅱ「作用即性」といわれる馬祖禅を前提とする。『血脉論』、「佛は是れ西國の語なり、此の土には覺性と云う。覺とは是れ靈覺なり。應機接物、揚眉瞬目、運手動足、皆な是れ自己靈覺の性なり。性は即ち是れ心、心

は即ち是れ佛、佛は即ち是れ道、道は即ち是れ禪なり」(Z一〇一四〇六d)。「中華伝心地禪門師資承襲図」、「洪州の意とは、起心動念、彈指動目、所作所爲、皆な是れ佛性の全體の用にして、更に別の用無し」(Z一〇一四三三五d)。

○王若作用、無有不是 〓道忠『五家正宗賛助策』卷一・達磨章、「忠曰く、見性の人は作用を使い得るなり。王若し能く見性して作用を使い得れば則ち處處皆な是なるべしを言うなり」(禪文化研究所基本典籍叢刊、三八頁)。

○王若不用、體亦難見 〓道忠『五家正宗賛助策』卷一・達磨章、「忠曰く、不用とは作用を使い得ざるなり。眼見耳聞を絶つを謂うに非ず。體とは、用を發するの性體なり。體を見ずんば則ち用い得ること能わずと^い言うべし。而今王の作用に由りて體を見んと欲す、故に倒言するなり」(同、三八頁)。

○波羅提即説偈曰…… 〓『首楞嚴經』卷六の偈に、性の円通を説いて「元と一精明に依り、分かれて六和合と成る」(T一九一三二b)とまとめられているのを展開したものを。後に臨済の説法に取り上げられる。『臨済録』示衆、
 『祖堂衆』卷一九・臨済章、
 『宗鏡録』卷九八、
 『伝灯録』卷二八など。また知訥の『修心訣』(『禪学叢書之二』、五四頁下段)、
 『真心直説』(同、六三頁上段)にも引かれる。『血脉論』、「聖人の種種分別、皆な自心を離れず。心量は廣大にして應用窮まり無し。眼に應じて色を見、耳に應じて聲を聞き、鼻に應じて香を嗅ぎ、舌に應じて味を知る。乃至施爲運動、皆な是れ自心なり」(Z一〇一四〇六b)。

○精魂 〓肉体に宿るたましい、精神魂魄。肉体が滅びても不死。李華「弔古戰場文」、「弔祭至らずんば、精魂依る無し」。「弄精魂」は、物の化に憑かれたようなふるまいのこと。

○典故について 〓『伝灯録』と明記されている。いま東禪寺版『伝灯録』卷三・達磨章をベースにして異同を示すと次のようである。

後值異^①見王、輕毀三寶。……(中略)……師不起于座、懸知宗勝義墮、遽告波羅提曰、宗勝不稟吾教、潛化於王、須臾即屈。汝可速救。波羅提恭稟師旨云、願假神力。言已、雲生足下、至王前、默然而住。時王正問宗勝、忽見波羅提乘雲而至、愕然忘其問答曰、乘空之者、是正是邪。答曰、我非邪正、而來正邪。王心若正、我無邪正。王雖驚異、而驕慢方熾、即擯宗勝令出。波羅提曰、王既有道、何擯沙門。我雖無解、願王致問。王怒而問曰、何者是佛。答曰、見性是佛。王曰、師見性否。答曰、我見佛性。王曰、性在何處。答曰、性在作用。王曰、是何作用、我今不見。答曰、今見作用、王自不見。王曰、於我有否。答曰、王若作用、無有不是、王若不用、體亦難見。王曰、若當用時、幾處出現。答曰、若出現時、當有其八。王曰、其八出現、當爲我說。波羅提即說偈曰、在胎爲身、處世名人。在眼曰見、在耳曰聞。在鼻辨香、在口談論。在手執捉、在足運奔。遍現俱該沙界、收攝在一微塵。識者知是佛性、不識喚作精魂。王聞偈已、心即開悟。乃誨謝前非、咨詢法要、朝夕忘倦、迄于九旬。(禪文化研究所影印本、三〇頁下)

大字は共通する文字、小字は『伝灯録』にのみ見える字。

- ① (西天) 十異 (宝蔵)
- ② 問十 (波羅提尊者) (宝蔵)
- ③ 曰云 (宝蔵)
- ④ 見現 (宝蔵)
- ⑤ 口舌 (宝蔵)

他にこの話を収めるものに、『天聖広灯録』卷六(乙二三五―三一九c)、『伝法正宗記』卷五(T五一―七四一c)、『修心訣』(T四八一―〇〇六a)、『禪門拈頌集』卷三がある。

〔五二〕 魏明帝問

魏明帝問天竺三藏迦摩羅陀曰、佛經之中、何經歸依、君國有益。三藏答曰、此地不是經法之處。帝問、是何所由。藏

曰、不遠年間、我師般若多羅同學菩提達摩、降至此國、傳佛心印之處、所以經法不行。帝問、漢帝已來、大藏東流中、寄十二部經之外、何有佛心法印。藏曰、本師釋迦、王宮誕生。長而十九、觀之藏中、寄十二部經、未契祖師之宗。遠至雪山、遊行十二年紀。求尋祖院、傳得心印之法、於後雪山成道。普光殿說、及於七處八會、不及心印之法。所以經律論別外之道。昔時天子、遺經教法、信受奉行、作小國王、呼爲八萬也。天子今時、特行佛心禪法、合諸小國、或作大朝天子、呼爲十二國。帝乃信受。

魏明帝所問諸經篇

*

魏の明帝、天竺三藏の迦摩羅陀に問うて曰く、「佛經の中、何の經に歸依せば、君國に益有らん」。三藏答えて曰く、「此の地は是れ經法の處ならず」。帝問う、「是れ何の所由ぞ」。藏曰く、「遠からざる年間に、我が師般若多羅と同學の菩提達摩、此の國に降至し、佛心印を傳えるの處なれば、所以に經法行なわれず」。帝問う、「漢帝より已來、大藏東流の中、十二部經に寄るの外、何の佛心印法有るや」。藏曰く、「本師釋迦、王宮に誕生す。長じて十九、之を藏中に觀て、十二部經に寄るも、未だ祖師の宗に契わず。遠く雪山に至り、遊行すること十二年紀。祖院を求尋し、心印の法を傳得し、後に雪山に成道す。普光殿に説くこと、七處八會に及ぶも、心印の法に及ばず。所以に經律論別外の道あり。昔時、天子、遺經の教法を信受奉行し、小國王と作り、呼んで八萬と爲す。天子、今時、特に佛心の禪法を行じ、諸の小國を合せば、或は大朝の天子と作り、呼んで十二國と爲さん」。帝乃ち信受す。

魏明帝所問諸經篇

*

魏の（孝）明帝は、インド出身の三蔵法師迦摩羅陀にきいた、ブツダの御説法のなかで、どのテキストを信ずるの
が、君子の国家に利益であろうか。

蔵 このくには、テキストの場所がらじゃありません。

帝 どういうわけか。

蔵 やがてまもなく、私の先師ハンニヤタラと同門のボダイダルマ大師が、このくくに降臨なされて、ブツダの心
印をお伝えになる国がらす。そういうわけで、テキストははやりませぬ。

帝 漢の（明）帝以来、偉大なるブツダの言葉が、東のくくにひろがつているというのに、十二部教をたよる以外
に、そもそもブツダの心法の印があるのか。

蔵 本師シャカムニは、王室に生誕なされて、成人すること十九歳、くまなくテキストを読破し、十二部をたよ
りましたが、まだ祖師の宗旨にかなわぬと（知って）、はるかなる雪山に入り、学びつづけて十二年ひとめぐり、（さ
らに）祖師の棲家を見つけたして、心印の真実を授けられ、そこで始めて雪山で成道なされました。普光殿では七処
八会まで、（詳しく）説法しても、心印の真実には行きつかない。経律論という三蔵とは別の道であったわけだ。昔
は天子が（仏陀の）遺した言葉を受け入れ、実行して、群少国家の王となり、八万（の法蔵）とよばれる。天子は今、
特に仏陀の心である禅仏教をひろめて、群少国家を統合なされよ。さらに偉大な朝家の天子となり十二国とよばれよ
う。

帝はそこで、受け入れた。

*

○魏明帝Ⅱ北魏第八代肅宗（孝明帝）。世宗（宣武帝）の第二子、名は詔。五一〇—五二八。在位は五一五—五二八。生母で摂政の靈太后の専権を除かんとして逆に毒殺された。在位の五一六年に靈太后の建立に成る永寧寺を西域僧の菩提達磨が見て口に南無と誦して合掌したことが『洛陽伽藍記』卷一・永寧寺の条に見える。『宝林伝』卷八では、達磨を三たび召すも到らず、袈裟二領、金鉢等を賜うことを三たびにして受けたことを記す。

○天竺三藏迦摩羅陀……Ⅱ般若多羅と同学の菩提達磨に先だつて、般若多羅に学んだ僧が漢地への仏心印伝法の地ならしをしたということは、この話以外未詳。『北山録』卷六「譏異説第十」にいう、「異説に曰く、達磨は既に傳法に當り、二弟子を漢地に至らしむるに、秦人に廬山に擯^{しりぞ}けらる（即ち跋陀なり）。因りて遠公と禪要經を出だす。達磨は之を聞いて慷慨し、乃ち自ら西土に出でんとして、海を濟り梁に于^ゆく。梁人甚だ信ぜず、北に大乘の氣有るを望み、遂に魏に適く（此の敘ぶる所並びに寶林傳は、高僧傳と乖異す）」（T五二一六二c）。達磨が漢地に二人の弟子を使わしたという説話は『歷代法宝記』菩提達摩多羅禪師章に見える創説を承けるもの。契嵩『伝法正宗論』卷上（T五一—七七五b）にも言及されており、『北山録』の年代が齟齬するという批判に対して反論し、『宝林伝』を擁護する。般若多羅と菩提達磨が同学であるという説、及び般若多羅を師とする僧が、達磨に先だつて中國に趣いたという説は、他には見当らぬが、恐らく『宝林伝』の祖統説を考慮しつつ、『歷代法宝記』の説を構築しなおしたものであろう。

○君國Ⅱ天子の統治する国。『国語』晋語四、「君國は以て百姓を濟うべし。而るに之を釋^すてる者は、人に非ざるなり」。

○漢帝已來、大藏東流中ニ仏教が中国に入った始めは、後漢の孝明帝のときとされる。「魏書」釈老志、「哀帝の元壽元年（前二年）、博士弟子の秦景憲、大月氏王の使の伊存の、浮屠經を口授するを受く。中土之を聞くも未だ之を信了せず。後に孝明帝、夜に金人を夢みるに、頂に白光有りて殿庭に飛行す。乃ち群臣に訪うに、傳毅始めて佛を以て對う。帝は郎中の蔡愔・博士弟子の秦景等を天竺に使わし、浮屠の遺範を寫さしむ。愔は仍りて沙門の攝摩騰・竺法蘭と東して洛陽に還る。中国に沙門及び跪拜の法有るは、此れより始まる」。後漢明帝の感夢求法の説話は、「牟子理惑論」（『弘明集』卷二）、「四十二章經序」（『出三藏記集』卷六）等に見える。詳しくは塚本善隆訳注『魏書釈老志』（東洋文庫、一〇〇頁）参照。

○十二部經ニ仏所説の教法を内容・形式によつて分類したもの。「摩訶般若波羅蜜經」卷一・序品第一、「菩薩摩訶薩は、十方諸佛の説く所の十二部經たる修多羅・祇夜・受記經・伽陀・憂陀那・因縁經・阿波陀那・如是語經・本生經・方廣經・未曾有經・論議經を聞かんと欲す。諸の聲聞等は、聞くと聞かざると盡く誦し受持せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學ぶべし」（T八一・二二〇b）。

○祖院ニ祖師の住まわれている院。「四」では『達磨密録』を引いて「眞歸祖師は雪山に在り、叢木房中に釋迦を待つ」といい、「二四」の『海東七代録』では、「游行すること數十月、祖師なる眞歸大師を尋訪し、始めて玄極の旨を傳得す」とあつて、この祖院は眞歸祖師の住む院ということにならう。『宋高僧伝』卷一六・梁京兆西明寺慧則伝、「咸通三年（八六二）、崇聖寺に就いて俱舍論並びに喪服儀・出三界圖一卷を講ず。七年、祖院に於て暢師に代わりて講ず」（T五〇一・八〇九a）。

○雪山成道ニ釈迦成道は、摩揭陀国の菩提樹の下で明星を見て悟道したとされるのが普通であり、雪山（ヒマラヤ）ではない。『虚堂録』卷六の仏祖讚「離雪山像」の道忠の注にいう、「離雪山像。忠曰く、禪者は常に、雪山に明星

を見て悟道す、悟道し畢りて山を出ず、と話す。大いに經論の説に異なる。今且く其の説に依り、悟道し畢りて山を出ずる像を畫いて、以て離雪山像と爲す」（禪文化研究所基本典籍叢刊『虚堂録犁耕』七二一頁上段）。中国禪林で好まれた画題である「出山釈迦図」は、雪山で苦行した後に悟道して山を下りる図と説明されている。『悟性論』に、「十方に飛騰し隨宜救濟する者は、化身佛なり。惑を斷ちて善を修し雪山に成道する者は、報身佛なり。無言無説にして湛然常住なる者は、法身佛なり」（T四八―三七二c）とあり、中唐の頃から既に「雪山成道」の説話が形成されていたらしい。

○普光殿Ⅱ普光明殿。摩揭陀国の菩提道場の側にあつたとされる。『華嚴經』が説かれた第二と第七の法会の場所。『華嚴經（六十卷）』卷二二・如來名号品第七、「爾の時、世尊、摩竭提國の阿蘭若法菩提場中に在りて始めて正覺を成じたまい、普光明殿に於て蓮華藏師子の座に坐したもう」（T一〇―五七c）。

○七處八會Ⅱ旧訳『華嚴經（六十卷）』で仏陀が説法された場所と会合の回数。八会とは、第一寂滅道場会・第二普光法堂会・第三切利天会・第四夜摩天宮会・第五兜率天宮会・第六他化自在天会・第七普光法堂会・第八重閣講堂会。このうち普光法堂が二回あり、七処となる。因に新訳『華嚴經（八十卷）』は七処九会である。

○昔時天子、遺經教法……呼爲八萬Ⅱ遺經教法を信受奉行した天子は、八万国に分かれた一小国の王にしかなれぬ。「八萬」は数の多いことの喩えであり、八万法門に通じ、その一法門を信受しているにすぎないことを、小国王と言ったもの。後漢の孝明帝以後、後漢末の頃から仏教は陸統と中国に流入するが、二二〇年に後漢が亡んで以後、五八九年の隋の大統一まで未曾有の乱世となり、中国大陆は南北に分かれ、北は五胡十六国が興亡したが、そのよくな小国の興亡は、遺經教法を信受したからだと言わんとするものか。「遺經教法」は、仏陀が残された一代時教のこと。

○天子今時……呼爲十二國〓仏心禪法を行ずれば、十二国（十二部經）の上に立つ、大朝の天子となられましよう。
○典拠について〓『魏明帝所問諸經篇』と明記されているが、本書については不詳。

〔五三〕 梁武帝問

梁武帝問達摩、朕即位已來、造寺寫經度僧、不可勝數、有何功德。師曰、並無功德。帝曰、何以無功德。師曰、此但人天小果有漏之因、如影隨形、雖有非實。帝曰、如何是真功德。師曰、淨智妙圓、體自空寂、如是功德、不以世求。帝後製達摩碑云、見之不見、逢之不逢、古之今之、悔之恨之。

傳燈及達摩碑

*

梁の武帝、達摩に問う、「朕は即位してより已來このかた、寺を造り經を寫し僧を度すこと勝あげて數うべからず、何の功德か有る」。師曰く、「並びに無功德」。帝曰く、「何ぞ以て無功德なるや」。師曰く、「此れは但だ人天の小果・有漏の因なるのみにして、影の形に隨うが如く、有ると雖も實なるに非ず」。帝曰く、「如何なるか是れ眞の功德」。師曰く、「淨智妙圓にして體自ら空寂、是の如き功德は世を以て求めず」。帝、後に達摩碑を製して云う、「之を見て見ず、之に逢うて逢わず、古も今も、之を悔い之を恨む」。

傳燈及び達摩碑

*

梁の武帝は、ダルマにきいた、朕は天子となつてこのかた、寺を立て経典を写し、僧侶を育てたこと、数え切れぬほど多い。さだめし報いがあるな。

師 報いは全く、ございません。

帝 どうして、報いがないのか。

師 それらはすべて、(六道のうち) 人界と天界に生れるだけの、小つぽけな果報で、汚染のもとです。人影が身についてまわるように、有つて無きにひとしいもの。

帝 どういうものが、真実の報いか。

師 清浄なる智恵は、靈妙で完全なもの、その本体は空々寂々です。こういう報いは、一代や二代では求められませんが。

帝は後年、ダルマの碑文を書いてこういう、

せつかく御目にかかつても、本当は御目にかかつていない、せつかく出会つても、本当は出会っていない、その時から今まで、ずつとくやしがり、恨みつづけている。

*

○梁武帝Ⅱ梁の初代皇帝蕭衍、四六四―五四九。在位は五〇二―五四九。父の蕭順之は齊の高帝となつた蕭道成の族弟に当り、幼少より親交があり、蕭道成に従つて転戦し武功を立て、道成が帝位につくとともに要職を歴任した。

齊は第三代昭業以後、一族同士の殺戮を繰返して勢力を失い、遂に蕭衍が和帝に迫つて禪讓させ梁朝を立てた。三九歳で帝位につき、四八年に及ぶ治世は、内政が整い、中国南朝貴族文化の最盛期を現出させたが、晩年、候景の

乱により、わずか二世三代で滅亡した。武帝は儒教や文学を修め、深く仏教に傾倒した。開善寺知蔵・光宅寺法雲・莊嚴寺僧旻・宝誌・宝唱等多くの僧を保護し、多くの寺院を建造し、都の建康には大寺七百余所、僧尼講衆は常に万人あったといわれる。自ら『涅槃經』『般若經』などを講じ、注釈書も多く著わし、学僧に多くの書を編纂させた。彼の仏教関係の作品は『弘明集』、『広弘明集』に収められているが、武帝が達磨のために撰したとされる碑は、昭明太子の祭文とともに、『宝林伝』巻八に初めて掲げられるもので、仮託の作である。

○梁武帝問達磨……武帝と達磨の問答は神会『菩提達摩南宗定是非論』に初めて見え、『歴代法宝記』『宝林伝』を経て『祖堂集』『伝灯録』に到って完成する。〔四七〕の注も参照。

『定是非論』

『歴代法宝記』

『宝林伝』巻八

『祖堂集』巻二

『伝灯録』巻三

梁武帝出城躬迎。昇殿問曰、和上從彼國將何教法來化衆生。達摩大師答、不將一字來。

余時武帝問、如何是聖諦第一義。師曰、廓然無聖。帝曰、對朕者誰。師曰、不識。帝問曰、朕即位已來、造寺寫經度僧不可勝紀、有何功德。師曰、並無功德。帝曰、何以

武帝問法師曰、朕造寺度人、造像寫經、有何功德不。達摩答、無功德。武帝凡情不了達摩此言。

(胡適『神会和尚遺集』一六〇頁)

帝又問、朕造寺度人、寫經鑄像、有何功德。大師答曰、並無功德。答曰、此乃有爲之善、非真功德。武帝凡情不曉。

(T五一—一八〇c)

尔時武帝問達摩曰、朕造寺寫經及度僧尼、有何功德。達摩答曰、無功德。武帝曰、云何無功德。達摩曰、此有爲之善、所以無功德。是時梁帝不晤此理。(『禪学叢書之五』、一三二頁下段左)

又問、朕自登九五已來、度人造寺、寫經造像、有何功德。師曰、無功德。帝曰、何以無功德。師曰、此是人天小果有漏之因、如影隨形、雖有善因、非是實相。武帝問、如何是實功德。師曰、淨智圓妙、躰自空寂、如是功德、不以世求。武帝不了達摩所言、變容不言。(『禪学叢書之四』、一一七二)

無功德。師曰、此但人天小果有漏之因、如影隨形、雖有非實。帝曰、如何是真功德。答曰、淨智圓妙、體自空寂、如是功德、不以世求。帝又問、如何是聖諦第一義。師曰、廓然無聖。帝曰、對朕者誰。師曰、不識。帝不領悟。(T五一—二一九a)

○寫經ニ經を受持し、誦誦し、書写する功德の偉大なことは、『法華經』法師功德品、『金剛經』などに見える。
○如影隨形、雖有非實ニ影は仏教では実有ならざるものの喩。『金剛般若經』、「一切の有爲法は、夢・幻・泡・影の如く、露の如く亦た電の如し」(T八一七五二b)。「祖堂集」卷一五・汾州無業章、「一切諸法は影の如く響の如く、實なる者有る無し」(『禪學叢書之四』、四一—一〇〇)。また『達摩の語録』、「影は形に由りて起り、響は聲を逐つて來たる。影を弄し形を勞するは、形は是れ影なるを知らず。聲を揚げて響を止めんとするは、聲は是れ響の根なるを知らず。煩惱を除いて涅槃を求むる者は、形を去つて影を覓むるに喩う。衆生を離れて佛を求むる者は、聲を黙して響を尋ぬるに喩う」(『禪の語録』五三頁、筑摩書房)。
影と形の喩については『列子』説符第八・第一章、「列子顧みて影を觀るに、形枉まがれば則ち影曲り、形直なれば則ち影正し。然れば則ち枉直は形に隨つて影に在らず」。

○淨智妙圓、體自空寂ニ淨智は如來清淨智、般若智のこと。『伝灯録』卷四・招賢寺會通章、「師、家に至かえりて未だ幾ならざるに、會たまたま韜光法師之に勉すすめて鳥窠すずに謁して檀越ととと爲らしむ。與ともに庵を結び寺を創る。寺成りて啓して曰く、弟子は七歳にして蔬食し、十一にして五戒を受く。今年二十有二、出家の爲の故に官を休む。願わくば和尚、僧相を授與せられんことを。曰く、今時は僧と爲るも精苦する者鮮ひし。行は多く浮濫たり。師曰く、本と淨にして琢磨たくまに非ず、元と明にして照すに隨わず。曰く、汝若し淨智妙圓、體自空寂なるを了ぜば、即ち眞の出家なり。何ぞ外相を假らんや。汝當に在家の菩薩と爲り、戒施俱に修し、謝靈運たくいの如くなるべし」(T五一—二三〇c)。
○達摩碑ニ武帝が達磨の碑文を撰したという説は、石井本『神會語録』(一五〇)に於て創唱された(鈴木貞太郎・公田連太郎校訂『敦煌出土荷沢神會禪師語録』、森江書店、一九三四年)。「歷代法寶記」もこのことを記すが、碑文はま

だ見えず、『宝林伝』巻八・達摩行教游漢土章布六葉品第三十九に於て昭明太子の祭文と共に収めるのが初出である。元和年間（八〇六―八二〇）に、李朝正が『重建禪門第一祖菩提達摩大師碑陰文』（『全唐文』九九八）を書いており、最澄（七六七―八二二）の『達摩大師付法相承師師血脈譜』（『内証仏法相承血脈譜』、日本大藏經三九―三三〇）には、達磨碑の頌の部分が引かれ、『宝林伝』のものと同じしている。柳田聖山『初期禪宗史書の研究』（三三二―三三三頁）では詳しい考証がなされ「先ず武帝の撰碑説が現われた後、謚號塔號の追贈があり、やがて武帝の碑文なるものが出現したのではないかと思われる」とされている。なお現在、嵩山少林寺に現存している達磨大師碑銘は、至元五年（一三三九）、少林寺長老息庵が発願し、歐陽玄が重建敘を添え、至正七年（一三四七）に成つたもので、鷲尾順敬『菩提達磨嵩山史蹟大観』（昭和七年二月）に収録されている。

○典拠についてⅡ 『伝灯及達磨碑』と明記されている。達磨碑は『宝林伝』以外には、『伝法正宗記』巻五・達磨章（T五一―七四三c）、『碧巖録』第一則・本則評唱（T四八一―四〇c）に、本話に見えるものを含むごく一部が引かれるのみ。いま東禪寺版『伝灯録』巻三・達磨章及び『伝法正宗記』の該当部分をベースにして異同を示すと次のようである。

帝問^①曰、朕即位已來、造寺寫經度僧、不可勝紀^②、有何功德。師曰、並無功德。帝曰、何以無功德。師曰、此但人天小果有漏之因、如影隨形、雖有非實。帝曰、如何是真功德。答曰^③、淨智妙圓、體自空寂、如是功德、不以世求。

帝又問、如何是聖諦第一義。師曰、廓然無聖。帝曰、對朕者誰。師曰、不識。帝不領悟。師知機不契、是月十九日潛迴江北。十二月二十三日、居于洛陽。當後魏孝明太和十年也（以上、東禪寺版『伝灯録』、禪文化研究所影印本、三三二頁上段）。

遂欲碑之、尚未暇作。及聞宋雲之事、益如追慕、即成其文。其略曰、爲玉甃久灰、金言未剖、誓傳法印化人天竺、及乎杖錫來梁、說無說法、如暗室之揚炬、若明月之開雲。聲振華夏、道邁古今。帝后聞名、欽若昊天。又曰^④、嗟乎、見之不見、逢之不逢、今之古之^⑤、

悔之恨之。朕雖一介凡夫、敢師之於後。其爲帝王仰慕之如此也（以上、『伝法正宗記』、T五一—七三四c）。

大字は共通するもの、小字は『伝灯録』或は『伝法正宗記』。

- ①帝問||梁武帝問達摩（宝蔵） ②紀||數（宝蔵） ③（師）十曰（宝蔵） ④曰||云（宝蔵） ⑤今||古（宝蔵） ⑥古||今（宝蔵）

〔五四〕 中印度國王迦勝

西竺中印度國王迦勝、崇信外道、值難于第二十五祖婆舍斯多曰、餘國素絶妖訛。師所傳者、當是何宗。祖曰、王國昔來、實無邪法。我所得者、即是佛宗。王曰、佛滅已千二百載、師從誰得耶。祖曰、飲光大士、親受佛印、展轉至二十四世師子尊者。我從彼得。王曰、師子比丘不能免於刑戮、何能傳法後人。祖曰、我師難未起時、密授我信衣法偈、以現師承。王曰、其衣何在。祖即於囊中出衣示王。王命焚之、五色相鮮。薪盡如故。王即追悔致禮。 傳燈録

*

西竺中印度國王の迦勝は、外道を崇信し、難を第二十五祖婆舍斯多に値して曰く、「餘の國は素より妖訛を絶つ。師の傳うる所の者は當は何の宗ぞ」。祖曰く、「王の國には昔より來、實に邪法無し。我れ得る所の者は、即ち是れ佛宗なり」。王曰く、「佛滅して已に千二百載、師は誰より得たるや」。祖曰く、「飲光大士、親しく佛印を受けてよ、展轉として二十四世の師子尊者に至る。我は彼より得たり」。王曰く、「師子比丘は刑戮を免るること能わず、

何ぞ能く法を後人に傳えん」。祖曰く、「我が師は難の未だ起らざりし時、密かに我に信衣・法偈を授け、以て師承を現わす」。王曰く、「其の衣は何くにか在る」。祖は即ち囊中より衣を出だして王に示す。王、之を焚かしむるに、五色相い鮮あざやかなり。薪盡くるも故もとの如し。王即ち追悔して禮を致す。

傳燈録

*

西のくに、中インド国の迦勝王は、外道を信仰して、第二十五祖婆舍斯多に難題をくらわせた。

我がくには、もともと邪教を禁じている。師の宣教するのは、いったいどういう宗旨か。

祖 王さまのおくには、昔からこのかた、全く邪教がありません、(そのように)私が広めるのは、ブツダの宗旨にほかならぬ。

王 ブツダは死んで、千二百年もたつ、師はいつたい、誰について広めるのか。

祖 飲光大士は直接に仏の印記をうけて(以来)、それからそれへと二十四代、師子尊者に至っています。私はこれについて広めます。

王 師子比丘は、死刑を免れ得なかつたはず。どうして後人に、伝法できようぞ。

祖 私の先師は、法難が始まる前に、ひそかに私に証拠の衣と、伝法の偈を授けました。(私は)それを今もゆずり受けています。

王 その衣は何処にあるぞ。

祖はすぐに袋の中から、衣をとりだして王にみせた。王は(臣下に)命じて焼かせたが、(もえあがる)五色の光あ

ざやかに、薪は尽きても（衣は）もとのまま。

王は悔いあらため、礼拝した。

*

○迦勝Ⅱ『宝林伝』巻六、『祖堂集』巻二、『伝灯録』巻二、『天聖広灯録』巻五、『伝法正宗記』巻四の婆舍斯多章では、得勝との問答とする。迦勝とするのは撰者の編集ミスである。『伝灯録』によれば、婆舍斯多は師子尊者に嗣いだ後、中印度に行き迦勝王のもとで外道と問答して信状させている。「第二十五祖婆舍斯多是罽賓國の人なり。……師子尊者に遇いて宿因を顯發し、心印を密受す。後に南天に適き中印度に至る。彼の國の王、名は迦勝なるもの、禮を設けて供養す。時に外道有り、無我尊と號す。先に王に禮重さる。祖の至るを嫉み、與なに論義せんと欲す。幸にして之に勝ち、以て其の事を固めんとす。乃ち王の前に於て祖に謂いて曰く、『我れ默論を解よくし、言説を假らず』。祖曰く、『孰か勝負を知る』。……是の如く往返すること五十九翻。外道は口を杜ざして信状す。時に祖は忽然と面北して合掌し、長吁して曰く、『我が師子尊者、今日難に遇えり、斯れ傷むべし』。即ち王を辭して南邁し、南天に達いたり、潛かに山谷に隱る」(T五—二五a b)。以下、得勝王との本話の問答へと接続する。

○婆舍斯多Ⅱ第二十六祖不如密多、第二十七祖般若多羅と共に『宝林伝』に於て全く新に登場した西天第二十五祖。師子尊者で断絶する祖灯を達磨に接続する使命をもつて創唱された。罽賓國の人、姓は波羅門。父の名は寂行、母は常安樂。

○佛宗Ⅱ『統高僧伝』卷一二・釈靖嵩伝、「釋靖嵩、……十五にして出家す。同學の靖融なるもの有り。早に經論に達し、小大を通該し、尤も雜心を究む。毎に佛宗の深要を以て、曲流に委示す」(T五〇一五〇一b)。「宋高僧伝」卷一〇・唐羅浮山釈宝修伝、「順宗皇帝、深く佛宗を重んず」(T五〇一七六八b)。

○佛滅已千二百載Ⅱ『宝林伝』に依れば、仏滅の日は周の穆王五十二年壬申歲二月十五日(紀元前九四九)に当り、師子尊者の示寂は魏の齊王二十年己卯歲(二五九年、元本『伝灯録』卷三・師子比丘章の注に云う、「當作高貴郷公六年、蓋齊王芳立十五年而廢矣。正宗記云、寶林傳誤作己卯。當是齊王芳丁卯歲也。然則是八年也」)に當る。従つてほぼ千二百載となる。但し『宝林伝』は、『周書異記』の説を承ける。

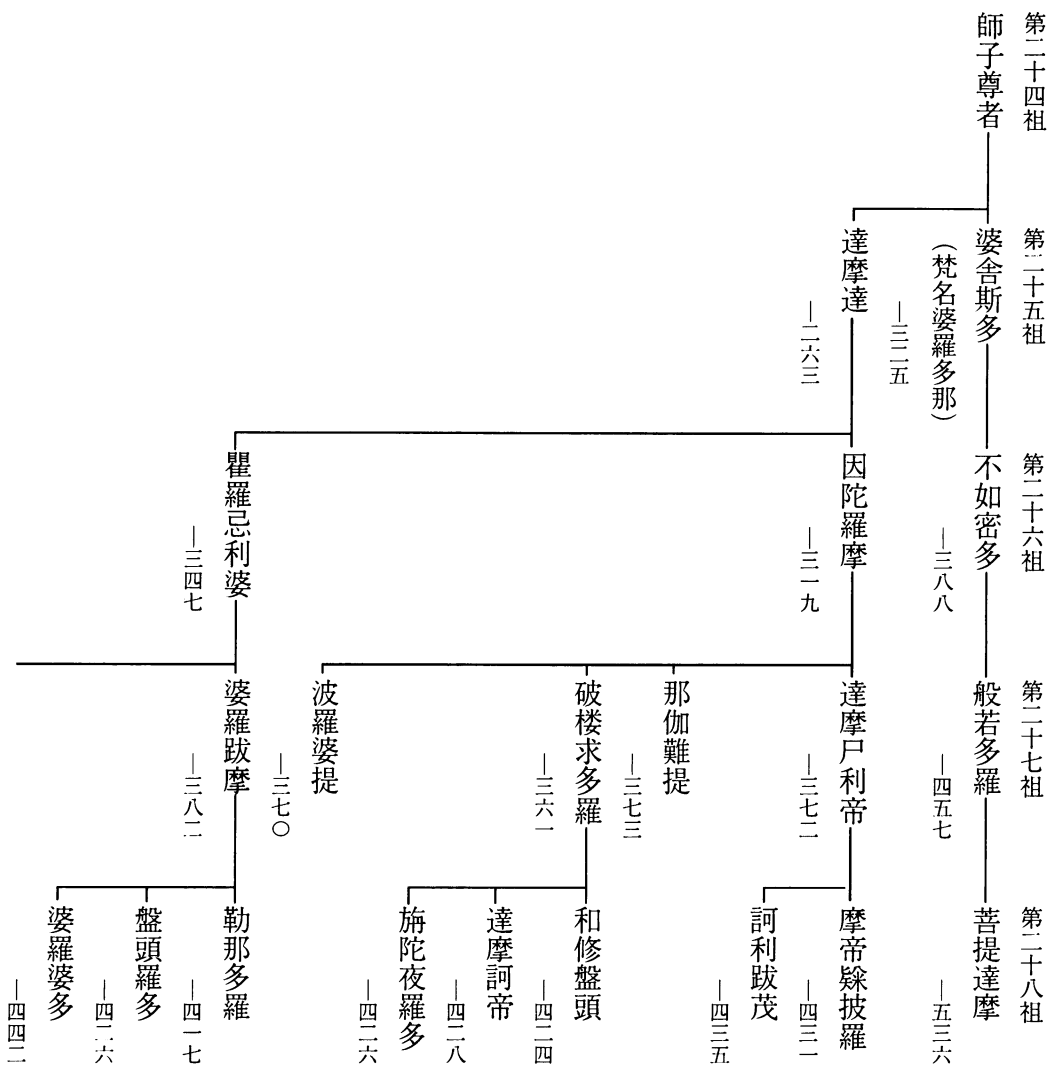
○飲光大士Ⅱ西天第一祖摩訶迦葉。飲光は迦葉波の訳名。吉藏撰『法華義疏』卷一、「迦葉は此には光と云い、波は此には飲と云う。合して之を言うが故に飲光と云う。飲光は是れ其の姓なり。上古に仙人あり、名は飲光と爲す。此の仙人の身に光明有りて能く諸光を飲^{かく}し、復た現われざらしむるを以てなり。今の此の迦葉は是れ飲光仙人の種なれば即ち飲光を以て姓と爲す。姓より名を立て、飲光と稱すなり。又た此の羅漢には亦た自ら光を飲^{かく}す事有り。其の人の身に金色の光明有り。閻浮檀の金は水底に在るを以て、金色水上に徹出すに、轉輪聖王の世に出でたもう時、夜叉等此の金を取り、將ち來たりて人間に博め易^あたむ。故に人間に此の金有り。此の金は人間に在るも、人間の諸金は復た現われず。金猶お迦葉の金色に及ばず。是の故に亦た飲光と名づくなり」(T三四一四五九b)。

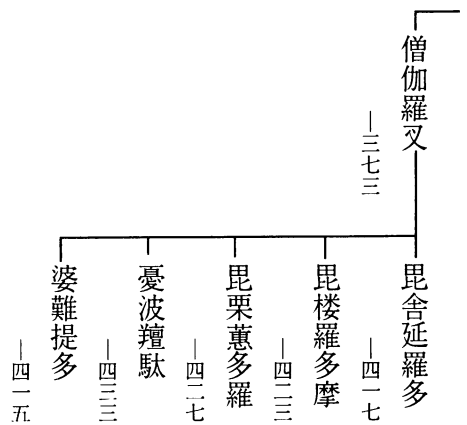
○師子尊者Ⅱ西天第二十四祖。師子比丘、師子菩提とも。中印度の人、姓は婆羅門。西天第二十三祖鶴勒那に得法した後、罽賓国に遊方し、波利迦・菩提達などを教化して南天竺に趣かせ、独り罽賓国に残つたが、その地の破仏に遭つて殺された。インドにおける伝承としての伝記は『付法藏因縁伝』卷六に立伝されている。禪宗祖灯説の立伝は『宝林伝』卷五・第二十四祖師子比丘章弁珠品三十が最初であり、『祖堂集』卷二、『伝灯録』卷二、『天聖広

灯録』卷四、『伝法正宗記』卷四などがある。

西天祖統説は、東晋の義熙七年（四一二）に覺賢の訳した『達摩多羅禪經』及び慧遠の付した序文『廬山出修行方便禪經統序』（『禪經序』）による八祖説と、北魏の延興二年（四七二）に吉迦夜と曇曜が共訳したとされる『付法藏因縁伝』の二十三祖説が源流である。師子尊者は『付法藏因縁伝』卷六に二十三祖として立伝される人物で、罽賓国の彌羅掘王の破仏に遇い、利劍で斬られ、ここに付法人が絶えたとされる（T五〇―三二一c）。このことが後に問題となる禪宗伝灯説では、師子尊者から東土の伝灯に結びつけるために種々の説が出現することになるのである。即ち大別して舍那婆斯系の西天祖統説と婆須蜜系のそれとである。

舍那婆斯系とは、『付法藏因縁伝』の二十三祖の師子比丘の後に『禪經序』で第四祖とされている舍那婆斯以下の五祖を結合させたもので、『故左溪大師碑』（七五四）、『歴代法宝記』（七七四）、『曹溪大師伝』（七八一）、敦煌本『六祖壇経』（七九〇年頃）、最澄『内証仏法相承血脉譜』（八一九）、宗密『円覚経大疏鈔』（八二三）、恵昕本『六祖壇経』（九六七）が舍那婆斯系の西天祖統説である。一方、婆須蜜系の西天祖統説は『宝林伝』（八〇一）で始めて主張されるもので、『付法藏伝』の二十三祖に『禪經序』の婆須蜜を第七祖として加え、舍那婆斯即ち商那和修、優婆崛即ち優婆鞠多の重複を整理し、第二十四祖師子尊者の後に全く新たに第二十五祖婆舍斯多、第二十五祖不如密多、第二十七祖般若多羅の三祖師を創り出して、第二十八祖の菩提達磨につないだのである。この『宝林伝』が成立すると南宗系の伝灯説は全てこの祖統説を忠実に受け継ぎ、『聖胄集』（八九九）、『泉州千仏新著諸祖師頌』、『祖堂集』（九五二）、『景德伝灯録』（二〇〇四）は婆須蜜系の西天祖統説で、その後の禪宗伝灯説の定説となる。なお『宝林伝』卷五の師子弟子章横師統引品第三一には、魏の支疆梁楼三蔵の『統法記』によるとして、師子尊者以後の正傍の法系と入寂年時を記しており、それを図示すると次の如くである。





(『初期禪宗史書の研究』三七四頁より採録)

祖統説に関する論文に、柳田聖山「灯史の系譜」(『日本仏教学会年報』第一九号)、田中良昭「『付法藏因縁伝』の西天祖統説」(駒沢大学『宗学研究』二三号、昭和五六年三月)、同「『付法藏因縁伝』とその発展」(駒沢大学『仏教学部研究紀要』三九号、昭和五六年三月)等がある。

○師子比丘不能免於刑戮Ⅱ『伝灯録』卷二・師子比丘章に次のようにいう、「〔師子〕尊者は難の以て苟しくも免るべからざるを以て、獨り闕賓に留まる。時に本國に外道二人有り。一は摩目多と名づけ、二は都落遮と名づく。諸の幻法を學び、共に亂を謀らんと欲す。乃ち盜に釋氏の形像と爲りて王宮に潛入す。且つ曰く、『成らずんば則ち罪を佛子に歸せん』。妖既に自作するに禍亦た踵を旋らす。事既に敗る。王果して怒りて曰く、『吾れ素より心を三寶に歸すに、何ぞ害を構えて一に斯に至るや』。即ち命じて伽藍を破毀し、釋衆を祛除す。又た自ら劍を乘りて

尊者の所に至りて問うて曰く、『師は蘊みの空なるを得るや』。尊者曰く、『已みに蘊の空なるを得』。曰く、『生死を離るるや』。尊者曰く、『已みに生死を離る』。曰く、『既に生死を離るれば、我に頭を施すべし』。尊者曰く、『身は我有に非ず、何ぞ頭を恠まんや』。王即ち刃を揮つて尊者の首を斷つ。白乳高さ數尺に涌く。王の右臂、旋なままち亦た地に墮つ。七日にして終る』(T五二—二二五a)。『伝灯録』は『宝林伝』を略したものになっているが、そのもととなったのは『付法藏因縁伝』である。「復た比丘有り、名を師子と曰う。罽賓國に於て大いに佛事を作す。時に彼の國の王、名は彌羅掘ミラクル、邪見熾盛にして敬信無し。罽賓國に於て塔寺を毀壞し、衆僧を殺害す。即ち利劍を以て用いて師子を斬る。頂中に血無く、唯だ乳流れ出るのみ。相付法人、是に於て便ち絶つ』(T五〇—三三二c)。

○師承ニ師資相承。『中華伝心地禪門師資承襲図』、「天寶の初め、荷澤は洛に入り、大いに斯の門を播き、方めて秀門下の師承は是れ謗にして、法門は是れ漸なるを顯わす」(Z二—〇—四三四b)。

○五色相鮮ニ五色は青・黄・赤・白・黒。莊嚴の色であり、靈驗・祥瑞のしるし。『宋高僧伝』卷二三・釈志通伝、「禪床に坐して終る。座を遷して闍維するに五色の煙有りて、頂上を覆う」(T五〇—八五九a)。

○追悔ニ『高僧伝』卷一一、「論に曰く、……掘多の世に至りて、阿育王なる者有り、王として波吒梨弗多城に在り。……政に在りて苛虐にして、經書を焚蕩し諸の得道を害す。其の後、心を易えて歸信し、前失を追悔す」(T五〇—四〇三a)。

○典拠についてニ『伝灯録』と明記されている。いま東禪寺版の該当箇所をベースにして異同を示すと次のようである。

遇師子尊者顯發宿因、密受心印。後適南天、至中印①度。彼國王名迦勝、設禮供養。……(中略)……即辭王南邁、達于南天、潛隱山谷。時彼國王名天德、迎請供養。王有二子。一凶暴而色力充盛。一和柔而長嬰疾苦。祖乃爲陳因果。王即頓釋所疑。又有呪術師、忌祖之道、乃潛置毒藥于飲食中。祖知而食之、彼反受禍、遂投祖出家。祖即與授具。後六十載、太子得勝即位、復信外道、致難于祖④。

太子不如密多、以進諫被囚。王遽問祖曰、子^①國素絕妖訛。師所傳者、當是何宗。祖曰、王國昔來、實無邪法。我所得者、即是佛宗。王曰、佛滅已千二百載、師從誰得耶。祖曰、飲光大士、親受佛印、展轉至二十四世師子尊者。我從彼得。王曰、予聞、師子比丘不能免於刑戮、何能傳法後人。祖曰、我師難未起時、密授我信衣法偈、以顯^②師承。王曰、其衣何在。祖即於囊中出衣示王。王命焚之、五色相鮮。薪盡如故。王即追悔致禮。師子真嗣既明、乃赦太子。(禪文化研究所影印本、二三頁上、二四頁上段)

大字は共通するもの、小字は『伝灯録』にのみあるもの。

- ①(西竺)十中(宝蔵) ②(崇)十信(宝蔵) ③致||值(宝蔵) ④祖||第二十五祖婆舍斯多(宝蔵)
⑤予||餘(宝蔵) ⑥顯||現(宝蔵)

〔五五〕唐憲宗皇帝

唐憲宗嘗詔大義禪師入内。師舉、順宗問尸利禪師、大地衆生、如何得見性成佛。尸利云、佛性猶如水中月、可見不可取。因謂帝曰、佛性非見、必見水中月、如何攫取。帝乃問、何者是佛性。師對曰、不離陛下所問。帝默契眞宗、益加欽重。

傳燈錄

*

唐の憲宗、嘗て大義禪師に詔して入内せしむ。師舉す、「順宗、尸利禪師に問う、大地の衆生は如何が見性成佛する

を得ん。尸利云く、佛性は猶お水中の月の如し、見るべくも取るべからず」。因りて帝に謂いて曰く、「佛性は見るに非ざるも、必ず水中の月を見る。如何が攫^{つか}み取るや」。帝乃ち問う、「何者か是れ佛性」。師對えて曰く、「陛下の所問を離れず」。帝、眞宗を默契し、益ます欽重を加う。

傳燈録

*

唐の憲宗は、あるとき大義禪師に勅して、入内を命じた。

師はテキストを読みあげた、順宗は尸利禪師にきいた、大地の上にとある生きものを、(師は)どのように見性成仏させるか。

尸利、仏性は水にうつる月のようなもの、見ることはできても、手に取ることはできません。

そこで(大義は)帝に申し上げた、仏性は見えようがないので、水中の月を見る必要があります。(陛下は)どう手づかみになされますか。

帝はそこで(あらためて)きいた、どういうものが仏性か。

師はこたえた、陛下の勅問の中にございます。

帝は暗黙のうちに、禪の宗旨にかなって、いよいよ尊重をふかめた。

*

○憲宗七七八―八二〇。順宗の長子。唐第十一代皇帝、在位は八〇五―八二〇。

剛明果斷な性格で、強大となった藩鎮の弾圧帰服を目ざして精励し、遂に朝威を回復させ、中興の英主と仰れた。晩年に丹薬を服して精神不安定となって怒りつぱく、侍臣の怨みをかい、宦官のために殺された。この時代、韓愈（七六八―八二四）、柳宗元（七七三―八一九）、劉禹錫（七七一―八四二）、白居易（七七一―八四六）、元稹（七七九―八三二）等の名賢が活躍した。元和一四年（八一九）の春正月、鳳翔府法門寺の仏骨を長安に迎え入れてその靈験を祈ったとき、韓愈は「論仏骨表」を上表してその狂信を諫めたが、憲宗の激怒にあつて潮州刺史に貶とされた事件は、仏教史上有名である。

○大義禪師（三八）に登場した。その注を見よ。

○順宗（七六二―八〇六）。徳宗の長子。唐第十代皇帝、在位は八〇五。性は寛仁で決断力があり、師傅を重んじ、必ず先に拝したといわれる。また心を芸術に留め、隸書を善くした。しかし、即位の前年に風病（中風）に罹つて言語障害を起し、即位した年の八月には太子に譲位し、元和元年（八〇六）正月に崩じた。

○戸利禪師（生没年不詳）。石頭希遷に嗣ぐ。『祖堂集』卷四・戸梨和尚章、『伝灯録』卷七・鵝湖大義章に順宗との問答を録し、他に『伝灯録』卷一四、『五灯会元』卷五に立伝されているが、石頭との機縁を一則録すのみである。『祖堂集』卷四・戸梨和尚章には次のように録されている。

戸梨和尚嗣石頭。順宗皇帝問師、大地普衆生、見性成佛道。師曰、佛性猶如水中月、可見不可取。大義禪師曰、佛性非見、必見水中月、何不攫取。帝嘿然之。又問大義、何者是佛性。大義云、不離陛下所問。皇帝嘿契玄關、一言遂合。（『禅学叢書之四』、一一一―一五七）

これは韋処厚撰「興福寺内道場供奉大徳大義禪師碑銘」（『全唐文』七二五）に基づくものであり、憲宗の時に入内したとする『伝灯録』の説と齟齬する。このことについて鈴木哲雄『唐五代の禅宗―湖南江西篇』（大東出版社、一

六九頁)に次のように述べられている。「碑文中、永貞初、順宗(八〇五年のみ在位)が康からず、それで信州に帰つたとされるから、順宗の次の憲宗では話が合わない。碑文中、孝文皇帝が内道供奉大徳となしたとしている。『新唐書』では徳宗(七七九—八〇五在位)は神武聖文皇帝というが、『旧唐書』では神武孝文皇帝というから、『旧唐書』に順つて、孝文帝とは徳宗である。即ち徳宗の召令で入内し、順宗にも法を説いたが、帝の健康が悪かつたので、信州の鷺湖山に帰つたのであつた」。

○佛性猶如水中月、可見不可取 Ⅱ 「水中月」は諸法の空なることの喩えとしての十喩の一つ。『摩訶般若波羅蜜經』卷一・序品、「諸法を了解すること、幻の如く、焰の如く、水中月の如く、虚空の如く、響の如く、乾闥婆城の如く、夢の如く、影の如く、鏡中像の如く、化の如し」(T八—二七a)。「大智度論」卷三二にいう、「菩薩は般若波羅蜜中に於て、一法の定性として取るべきもの有る無きが故に即ち破すべからず。衆生は因縁の空法に著すを以ての故に名づけて破すべきと爲す。譬は小兒は水中の月を見て心に愛著を生じ取らんと欲すれども得る能わず、心に憂惱を懷くに、智者は教えて、眼に見るべきと雖も手に捉うべからずと言ひ、但だ取るべきを破して見るべきを破せざるが如し」(T二五—二九七a)。

○佛性非見、必見水中月、如何攫取 Ⅱ 戸利和尚のように皇帝を突き放すのではなく、「佛性は見えるものではないが、水中の中は必ず見える。それをどう捕えるかです」と柔らかく対応した。「如何攫取」は『碑銘』『祖堂集』では「何不攫取」になっている。

○不離陛下所問 Ⅱ 陛下がそのように問われたそのお心と別ではありません。「宗鏡録」卷一四、「馬祖大師云く、汝若し心を識らんと欲せば、祇今語言するもの、即ち是れ汝の心なり。此の心を喚んで佛と作す。亦た是れ實相法身佛なり。亦た名づけて道と爲す」(T四八—四九二a)。

○默契Ⅱ言葉を越えたところで了解する。『伝心法要』、「心は自ら無心にして、亦た無心なる者無し。心を將て心を無なすれば、心は却つて有と成る。默契する而已のみ」(『禪の語録8』一三頁、筑摩書房)。『宗鏡録』卷一、「祖は禪理を標わして、默契の正宗を傳え、佛は教門を演じて、詮下の主旨を立つ」(T四八一四一七b)。

○眞宗Ⅱ眞實の本源。『宗鏡録』卷一、「故に信心銘に、『六塵むく惡まざれば還つて正覺に同じ。智者は無爲にして愚人は自縛す』と云う。斯の如く達すれば、則ち六塵は皆な是れ眞宗、萬法は妙理に非ざる無し」(T四八一四二〇a)。また禪宗と同義で用いられることも多い。例えば敦煌文獻に『大乘開心顯性頓悟眞宗論』(T八五)があり、荷沢神会の墓塔の号は、「眞宗般若伝法之堂」(『伝灯録』五、T五一―二四五b)である。龍牙居遁「頌十八首」の第十二首に言う、「菩薩聲聞は未だ空を盡さず、人天に來往して眞宗を訪う」(『伝灯録』二九、T五一―四五三a)。

○典拠についてⅡ『伝灯録』と明示されている。いま東禪寺版『伝灯録』卷七・鵝湖大義章の該当箇所をベースにして異同を示すと次のようになる。

唐憲宗嘗詔入内、於麟德殿論議……(中略)……師又舉、順宗問尸利禪師、大地衆生、如何得見性成佛。尸利云、佛性猶如水中月、可見不可取。因謂帝曰、佛性非見、必見水中月、如何攫取。帝乃問、何者是佛性。師對曰、不離陛下所問。帝默契眞宗。益加欽重。(禪文化研究所影印本、一〇六頁下段)

大字は共通するもの、小字は『伝灯録』にのみあるもの。

①(大義禪師) 十入(宝蔵)

〔五六〕 唐宣宗皇帝

唐宣宗問弘辯禪師、禪宗何有南北之名。師對曰、昔如來以正法眼付大迦葉、展轉至二十八祖菩提達磨、來遊此方爲初祖。洎第五祖忍大師、時有二弟子。一名惠能、受衣法居嶺南。一名神秀、在北揚化。其所得法雖一、而開導發悟有頓漸之異。故曰南頓北漸、非禪宗本有南北之號也。帝曰、何爲佛心。師曰、佛者西天之語、唐言覺。謂人有智惠覺照爲佛心。心者佛之別名、有百千異號、體唯一。如陛下日應萬機、即是陛下佛心。帝賜紫方袍、號圓智禪師。傳燈錄

*

唐の宣宗、弘辯禪師に問う、「禪宗は何ぞ南北の名有るや」。師對えて曰く、「昔如來は正法眼を以て、大迦葉に付し、展轉として二十八祖菩提達磨に至り、此の方に來遊して初祖と爲る。第五祖忍大師に洎び、時に二弟子有り。一を惠能と名い、衣と法を受けて嶺南に居る。一を神秀と名い、北に在りて化を揚ぐ。其の得る所の法は一なりと雖も、開導し發悟するに頓漸の異有り。故に南頓北漸と曰うも、禪宗は本と南北の號有るに非ず」。帝曰く、「何をか佛心と爲す」。師曰く、「佛とは西天の語、唐には覺と言う。人に智惠覺照有るを謂いて佛心と爲す。心とは佛の別名、百千の異號有るも、體は唯だ一有るのみ。陛下日に萬機に應ずるが如きは、即ち是れ陛下の佛心なり」。帝は紫方袍を賜い、圓智禪師と號す。

傳燈錄

*

唐の宣宗は、弘弁禪師にきいた、禪仏教にどうして、南北二宗の名があるのか。

師はこたえた、昔、如来は正法眼蔵を、大迦葉に授けました。それからそれへと、二十八祖菩提達磨に行きついて、(達磨は)わがくにきて宣教し、初祖となります。第五祖忍大師の時代になって、二人の弟子が出ました。一人は慧能という男、証拠の衣と正法をうけて、嶺南におりました。一人は神秀という男、北地において教化さかん。かれが得た正法は同じですが、(得るまでの)開発と開悟の過程に、頓漸のちがひがあるために、南方は頓、北地は漸というので、禅仏教そのものに、南北の名があるわけではない。

帝 どういうものが仏心か。

師 仏とはインドの言葉で、唐では覺者という。誰にも(生れながら)知恵があつて、自から覺めて(物を)映すのを仏心というのだ。心とは、仏の別名で、百千もの違つた名称があるが、本体はただ一つ。恰も陛下が万民の動きに、(びたりと)お答えになるように、とりもなおさずそれが、陛下の仏心なのです。

帝は紫の袈裟を賜わり、円智禪師とおよびあそばした。

*

○宣宗Ⅱ八一〇—八五九。憲宗の第十三子、穆宗の異母弟、敬宗・文宗・武宗の叔父に当る。唐第十六代皇帝。在位は八四六—八五九。八二一年に光王に封ぜられたが、武宗にうとまれ、黄檗あるいは塩官会下に僧となつていたという異聞がある。八四六年三月一日、武宗の死期がせまり、宦官に擁立されて皇太叔となり、翌日ひつぎの前で即位する。時に三十七歳であつた。武宗の破仏政策によって大打撃を被つた仏教を復興し、裴休を宰相に登用して善政を布いた。『資治通鑑』卷二四九の大中一三年の条に次のようにいう、「宣宗、性は明察にして沈斷、法を用い

るに私なく、諫いさめに従うこと流の如し。官賞を重惜し、恭謹節儉、民物を惠愛す。故に大中の政は、唐の亡ぶに訖んで、人は之を思詠し、之を小太宗と謂う」。吉川忠夫「裴休伝―唐代の一士大夫と仏教―」（『東方学報』京都第六四冊）に宣宗の潜龍時代の異聞及び仏教との関わりについての詳しい論述がある。

○弘辯禪師ニ生没年不詳。章敬懷暉ニ嗣ぎ、京兆大薦福寺に住した。宣宗との問答以外何も伝わらぬ。『伝灯録』巻九、『五灯会元』巻四。『仏祖歴代通載』巻一六では大中四年（八五〇）に入内したとして録している。

○昔如来以正法眼付大迦葉ニ『祖堂集』巻一・第五祖提多迦尊者章、「爾の時、提多迦、彌遮迦に告げて曰く、如来は正法眼を以て迦葉に付囑す。是の如く展轉して乃ち我に至る。我れ今此の法眼を將つて汝に付囑す」（『禅学叢書之四』、一一四〇）。正法眼は諸法の実相を正しく見て取る智慧の眼。

○五祖忍大師ニ（一一）に既に登場した。その注を見よ。

○神秀ニ六〇六？―七〇六。俗姓は李氏、汴州（開封）の人。歳五十で弘忍に従い、服勤すること六年、東山の法を尽くおさめた。儀鳳中（六七六―九）に荊州当陽山の玉泉寺に住し、とみに名声があがった。則天武后に招かれて、大足元年（七〇二）九十五歳のとき入内説法し、両京の法主・三帝の国師と呼ばれた。神龍二年（七〇六）洛陽天宮寺で寂し、大通禪師と諡号される。

この時代、東山法門の人々（法如・惠安・神秀・玄奘・智詵etc.）が次々に帝都に遊行し、嵩山に根拠地において布教する。そして開元のはなやかな世をむかえ、達磨を初祖とし神秀を六祖とする禅宗の一派の全盛期を迎えるのである。神会の六祖慧能顕彰運動は、帝都の上層貴族の帰依と保護を受けるそのような禅宗の一派に対する地方勢力のまきかえしであった。北宗という名は最初、神会によって呼ばれたもので、南宗の正系に対して、傍系の批判を含むもので、神秀一派が自ら名乗ったものではない。後がまであるところの洪州地方に擡頭してきた洪州宗（馬祖

を祖とする)が盛大となり、正系の位置を手に入れたため、神秀も神会も共に忘れ去られ、禪宗史上から姿を消していくのである。今世紀のはじめに発見された敦煌文書の中に含まれていた多数の初期禪宗に関する資料の研究によって、彼らの実像に光があてられるようになる。

神秀の伝記としては、『伝法宝紀』、『楞伽師資記』及び張説の『荊州玉泉寺大通禪師碑銘』(『全唐文』二二二)が最も古い。張説にはまた「与度門之禪衆書」(影宋本『張説之集』卷三〇)があり、碑文制作の背景や事情が語られ、神秀の教之が要約されていて有益である(吉川忠夫『三余錄』二二頁参照、中外日報社)。灯史以外の資料としては、『旧唐書』卷一九一、『宋高僧伝』卷八・神秀伝、『太平広記』卷九七・秀禪師章(『宗高僧伝』卷一九惠秀伝の内容とほぼ同じ)がある。思想を知るものとしては、伝統的に達磨のものとされてきたが近年になって神秀のものと判明した『観心論』(『破相論』は異本)があり、また『大乘無生方便門』(一名「大乘五方便」)がある。また義天の『新編諸宗教藏総録』卷一(T五五―二六六a・c)には『華嚴経疏』三十卷、『妙理円成観』三卷を神秀作とする。この二書は最近、高麗均如大師の著作及び日本高順の『起信論本疏聴集記』に引用が見つかり、神秀の著であることが確実視されるようになった。しかし、北宗禪の祖としての神秀より後に出了た華嚴に通暁した神秀の存在が見い出され、義天の目録に出る『華嚴経疏』『妙理円成観』の編者としての神秀とは、華嚴に通暁したもう一人の神秀であると論じられている(ベルナル・フォール「神秀と華嚴経」、『禪文化研究所紀要』第一五号)。

○其所得法雖一……非禪宗本有南北之號也 Ⅱ敦煌本『六祖壇経』、『善知識よ、法は頓漸無し、人に利鈍有り。明(迷)えば即ち漸に勸むるも、悟る人は頓に修す。自ら本(心)を識れば、是れ本性を見る。悟れば即ち元と差別無し、悟らざれば即ち長劫に輪廻せん』(T四八―三三八b)。「同」、「世人は盡く南宗の能、比(北)の秀と傳うも、未だ根本の事由を知らず。且く秀禪師は南荊府堂(當陽縣玉泉寺)に於て住時(持)修行す。惠能大師は韶州

城東三十五里の漕溪山に於て住す。法は即ち一宗なるも、人に南比（北）有り。此れに因りて便ち南北を立つ。何ぞ漸頓を以てせんや。法は即ち一種なれど、見に遅疾有り。見遅ければ即ち漸、見疾ければ即ち頓なり。法は漸頓無し、人に利鈍有り。故に漸頓と名づく」（T四八一三四二a）。

○佛者西天之語、唐言覺ト晋の袁宏『後漢紀』卷一〇・孝明皇帝紀の永平一三年、「浮屠とは佛なり。西域天竺に佛の道有り。佛とは漢には覺と云う」。

○智惠覺照ト般若の智慧と云う一切諸法を顯照する靈覺の働き。法藏『大乘起信論義記別記』、「凡そ覺を言うに二義有り。一は覺察の義、染も染すること能わざる所を謂うが故に即ち是れ斷障の義なり。二は覺照の義、自體は一切諸法を顯照するを謂う、即ち鑒達の義なり」（T四四一―二八八c）。『禪源諸詮集都序』、「若し知見覺照、靈鑑光明、朗朗昭昭、惺惺寂寂等と云わば、皆な是れ表詮なり」（T四八一四〇六b）。

○有百千異號、體唯一ト『宗鏡錄』卷九七、「法照禪師云く、經に云く、三阿僧祇の百千の名號は皆な是れ如來の異名なり。即ち眞心の別稱なり、と。又た經に云く、萬法は一心を出でず、と。此の義是れなり」（T四八一九四一b）。

○日應萬機、即是陛下佛心ト一切の言語動作は仏性の全体作用であるという洪州宗（馬祖禪）の宗旨を承ける。『祖堂集』卷一三・報慈和尚章、「師却つて問う、皇帝陛下の日に萬機に應ずるは、是れ什摩の心ぞ。皇帝云く、什摩處にか心を得來たる。師云く、豈に心無き者有らんや。帝云く、那邊の事は作摩生。師云く、那邊に向かつて問わんことを請う。帝云く、道えり。師云く、皇帝、衆人を謾あざむかんと要すは則ち可ならず」（『禪学叢書之四』、四一一一）。「萬機」は帝王の日常のさまざまな政事。『漢書』卷七四・魏相伝、「宣帝始めて萬機を親しくし、厲精に治を爲す」。

○紫方袍 紫の袈裟、紫衣。方袍は袈裟のこと。「宋高僧伝」卷六・宗密伝、「大和二年慶成節、徴して紫方袍を賜い大徳と爲す」(T五〇―七四二a)。

○典拠について 、『伝灯録』と明記されている。いま東禪寺版『伝灯録』卷九・京兆大薦福寺弘弁禪師章の該当箇所をベースにして異同を示すと次のようになる。

京兆大薦福寺弘辯禪師、唐宣宗問、禪宗何有南北之名。師對曰、禪門本無南北、昔如來以正法眼付大迦葉、展轉相傳、至二十八祖菩提達磨、來遊此方爲初祖。暨第五祖弘忍大師、在蘄州東山開法。時有二弟子。一名慧能、受衣法居嶺南、爲六祖。一名神秀、在北楊化。其後神秀門人普寂、立本師爲六祖、而自稱七祖。其所得法雖一、而開導發悟有頓漸之異。故曰南頓北漸、非禪宗本有南北之號也。帝曰、云何名戒。師對曰、防非止惡謂之戒。帝曰、何爲定。對曰、六根涉境、心不隨緣、名定。帝曰、何爲慧。對曰、心境俱空、照覽無惑、名慧。帝曰、何爲方便。對曰、方便者、隱實覆相權巧之門也。被接中下、曲施誘迪、謂之方便。設爲上根、言捨方便、但說無上道者、斯亦方便之譚。乃至祖師玄言、忘功絕謂、亦無出方便之迹。帝曰、何爲佛心。對曰、佛者西天之語、唐言覺。謂人有智慧覺照爲佛心。心者佛之別名、有百千異號、體唯其一。本無形狀、非青黃赤白男女等相、在天非天、在人非人、而現天現人、能男能女、非始非終、無生無滅、故號靈覺之性。如陛下日應萬機、即是陛下佛心。假使千佛共傳、而不念別有所得也。帝曰、如今有人念佛如何。對曰、如來出世、爲天人師善知識、隨根器而說法。爲上根者開最上乘頓悟至理、中下者未能頓曉。是以佛爲韋提希權開十六觀門、令念佛生於極樂。故經云、是心是佛、是心作佛。心外無佛、佛外無心。……(中略)……是日辯師對七刻、賜紫方袍、號圓智禪師。仍敕修天下祖塔、各令守護。(禪文化研究所影印本、一四三頁上―一四四頁下)

大字は共通するもの、小字は『伝灯録』。

- ①問十(弘辯禪師)(宝蔵) ②暨 泊(宝蔵) ③慧 惠(宝蔵) ④楊 揚(宝蔵)
⑤(師) 十 日(宝蔵) ⑥其 有(宝蔵) ⑦(帝) 十 賜(宝蔵)

〔五七〕同光帝問

同光帝問興化存獎禪師、朕收中原獲一寶、而未有人酬價。化云、略借陛下寶看。帝乃以兩手引幞頭脚示之。化云、君王之寶、誰敢酬價。帝大悅。

傳燈錄

*

同光帝、興化存獎禪師に問う、「朕は中原を收めて一寶を獲たり、而るに未だ人の酬價するもの有らず」。化云く、「略く陛下の寶を借し看よ」。帝乃ち兩手を以て幞頭の脚を引いて之を示す。化云く、「君王の寶、誰か敢えて酬價せん」。帝大いに悦ぶ。

傳燈錄

*

同光帝が、存獎禪師にきいた。朕は中原を平定して、一顆の宝珠を手に入れたが、まだ誰も価ぶみする奴がない。化 怖れながら、陛下の宝珠を（私に）お渡しあれ。

帝はそこで、両手で王冠のたれあしを（左右に）引っぱって見せた。

化 君王という大宝を、いったい誰が進んで、価ぶみするものですか。帝は満足であった。

*

○同光帝_二八八五—九二六。五代後唐を建国した李存勗、在位は九二三—九二六。唐を滅ぼした後梁の太祖朱全忠と敵対した晋王李克用の長子。九〇八年に父の死去によって晋王を嗣ぎ、後梁と抗争しながらも燕を収め契丹を卻け、九二三年に唐と号して同光と改元して帝位に即き、大梁を滅ぼして中原を支配した。洛陽を国都として政治を唐の旧に復したが、驕侈となつて政治を宦官にまかせて人心を失い、親軍の叛乱に遭つて殺された。

○興化存獎禪師_二八三〇—八八八。臨済に嗣ぐ。公乘億撰「魏州故禪大德獎公塔碑」(『文苑英華』八六八、『全唐文』八二三)に依れば、本籍地は鄒魯(山東省鄒縣)、字は存獎、姓は孔、孔子の末裔。祖父のとき官の命令によって、薊門(河北省薊縣)に移り住み、そこで生まれた。幼くして薊の三河縣(河北省三河縣)盤山甘泉院の曉方に従つて親しく教えを受け、大中五年(八五二)、盧龍軍節度使張公の奏によつてここに戒壇が置かれ、具足戒を受けた。大中九年(八五五)、張公が涿郡(河北省涿縣)に戒壇を起したとき、衆に請われて六年間に三たび講筵を統率したが、臨済大師玄公に礼謁し、黄檗の真筌、白雲の秘訣を受け、旧刹を辞して諸方を遍歴した。鍾陵(江西省南昌)に到つたとき、仰山大師の開法に遇い、開陳された奥義をよく解いて仰山の称歎を得た。ところが、臨済大師が蒲相蔣公の請を受けたことを聞き、戻つて参随し、白馬(河南省滑縣)に渡ろうとしたとき、大尉中〔書〕令何公に魏府に迎請され、臨済に従つて府下の觀音寺江西禪院に入った。一年もしないうちに臨済は遷化し、弟子として茶毘の礼を尽した。乾符二年(八七五)に、故郷の盤山に北帰するよう請われたが、韓公之叔は引き留めて、檀信の財貨を募つて魏府南甌門外通衢の左に院を建てて住持せしめた。以後、群迷を化し、解脱の門を開き無量の法門を説くに、六州の士庶は皆な勝因を結んだといわれる。文徳元年(八八八)七月一二日示寂、寿は五十九、僧臘は四十一。翌年八

月二二日に茶毘に付され、塔は府の南の貴郷縣薰風里に建てられた。他に『祖堂集』卷二〇、『伝灯録』卷一一、『天聖広灯録』卷一二、『続灯録』卷一、『聯灯会要』卷一〇、『五灯会元』卷一一等に伝記及び問答語句を録すが、伝記に関わるものは少ない。清代の編纂ではあるが『宗統編年』卷一七は、公乘億の碑銘に依っており、灯史の伝記を批判しており参照すべきである。また『古尊宿語録』卷五に「興化禪師語録」が収められている。柳田聖山「興化存獎の史伝とその語」（『禅学研究』四八号）に詳しい考証がある。『仏祖歴代通載』卷一七（丁四九一六五二b）は、九二四年の条に興化の章があり、同光帝（莊宗）との機縁を収めているのは、莊宗の史伝に合わせたものであり、『碑銘』に依るかぎり、年代的に二人が出会うことは不可能であり、この機縁も史実とは認められない。先の柳田論文では、この機縁が出来た時代と広済大師の追号を賜わったこととの間に密接な関係があったと推理されている。

○以兩手引幘頭脚示之〓皇帝として中原に君臨しているこの私こそがその宝だという気概。『易』「繫辭下伝」にいう、「天地の大徳を生と曰い、聖人の大寶を位と曰う」。『宋史』卷二五三「輿服五」に次のようにいう、「幘頭。一名は折上巾。後周（北周）より起る。然るに止だ軟帛を以て脚を垂るのみ。隋に始めて桐木を以て之を爲る。唐に始めて羅を繪えに代う。惟だ帝の服は則ち脚は上に曲り、人臣は下に垂る。五代に漸く平直に變わる。國朝の制には、君臣は通じて平脚を服し、輿に乗れば或は上に曲れるを服す。其の初めには藤織草巾を以て裏と爲し、紗を表と爲し、塗るに漆を以てす。後には惟だ漆を以て堅と爲し、其の藤裏を去る。前に一折を爲し、平に兩脚を施すに、鐵を以て之を爲る」。また『広韻』にいう、「幘頭は周の武帝の製る所なり。幅巾を裁したて、四脚を出し、以て頭に幘かぶる。乃ち焉これを名づく」。

○典故について〓『伝灯録』と明記されている。しかし、『宗門統要』卷六、『聯灯会要』卷一一、『禅門拈頌集』

卷一九の興化章に収められているものの方が『宝蔵録』によく一致する。いま『祖堂集』『伝灯録』『宗門統要』を比較すると次のようである。

『祖堂集』二一〇

同光帝問師、朕昨來河南取得一个寶珠、無人着價。師云、請皇帝寶珠看。帝以兩手撥開幙頭角。師云、皇帝是萬代之寶珠。誰敢着價。

『伝灯録』二二一

師後爲後唐莊宗師。莊宗一日謂師曰、朕收大梁、得一顆無價明珠、未有人酬價。師曰、請陛下珠看。帝以手舒開幙頭脚。師曰、君王之寶、誰敢酬價。

『宗門統要』六

師因同光帝云、朕收中原、獲一寶、而未有酬價。師云、略借陛下寶看。帝以兩手引幙頭脚示之。師云、君王之寶、誰敢酬價。帝太悦。

以上のように『伝灯録』のものは『宝蔵録』によく一致せず、『宗門統要』がよく一致する。そこで『宝蔵録』よりも六十年前に、同じ高麗時代に編纂された『禪門拈頌集』卷一九・興化章の該当箇所をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようである。

魏府興化存獎禪師。因同光帝問^①、朕收中原獲一寶、而未有酬價。師云、略借陛下寶看。帝以兩手引幙頭脚示之。師云、君王之寶、誰敢酬價。帝大悦。〔『高麗大蔵経』四六冊、三〇六頁上〕

大字は共通するもの、小字は『禪門拈頌集』にのみあるもの。

①問十（興化存獎禪師）（宝蔵） ②師二化（宝蔵） ③帝十（乃）（宝蔵）

〔五八〕 宋眞宗皇帝

宋眞宗皇帝臨御已來、探索祖教、曉然自得。嘗製偈曰、寂寂大虚空、淡淡如秋水。拂拭本無塵、不屬張王李。

普燈錄

*

宋の眞宗皇帝、臨御してより已來このかた、祖教を探索し、曉然と自得す。嘗て偈を製りて曰く、「寂寂たる大虚空、淡淡として秋水の如し。拂拭するも本より塵無く、張王李に屬さず」。

普燈錄

*

宋の眞宗皇帝は、即位してこのかた、祖師の言葉に探りをいれ、夜が明けたように自から覺めた。曾つて偈をおつくりになつて、こう言うのである。
静まりかえる大空、

満ち満ちて、秋の川のよう。

払い落そうにも、始めから塵がない、

張氏だ王氏だ、李氏だという、（氏族に）関係しないのだ。

*

○眞宗皇帝 九六八—一〇二二。北宋第三代の皇帝。在位は九九七—一〇二二。太宗の第三子。諸王より優れ、伯父である太祖に愛されて宮中に育ち、九九七年、三十歳のとき太宗の崩御にともなつて即位した。景德元年（一〇〇四）、契丹が侵入して黄河北岸の澶州の渡場に迫つたために親征し、澶淵の盟約を交わして和議した。しかし、盟約の恥ずべきことを王欽若が説いたため、封禅せんことを思い立ち、天書を偽造して大中祥符元年（一〇〇八）に泰山に封禅した。そのために起された大土木工事のために国の蓄えの大半を消費した。北宋創業時代のすぐ後であるため、世は太平であつた。

○臨御 天子として政務の場に臨むこと、即位して天下を治める。『晋書』三三・列伝二・康献褚皇后伝、「帝は元服を加^つけ、禮成り徳備わつて當陽に親覽し、萬國に臨御す。今、事を歸して政を反^{あらた}にし、一に舊典に依らん」。

○祖教 祖師の教え。仏教に対する言い方。『祖堂集』卷八・龍牙章、「師、衆に示して曰く、夫れ參學の者は須らく祖佛を透過して始めて得^よし。所以に新豊和尚道えり、佛教と祖教と生怨家の如くして、始めて學ぶに分有り、と。汝若し佛祖を透過し得ずんば、則ち祖佛に謾^{ばか}にさる」（『禪学叢書之四』、二二—五三）。『同』卷一七・岑和尚章、「問う、如何なるか是れ西來の祖教。師、良久す。學人敢て進語せず」（『同』、五一—二四）。

○曉然 はつきりと分かるさま。『宋高僧伝』卷三・総持寺智通伝、「洛京の翻經館に往き、梵書并びに語を學び、曉然と明解す」。

○自得 自ら心に得て体会する。『孟子』離婁章句下、「孟子曰く、君子の深く之に造^{いた}るに道^{てだて}を以てするは、其の之を自得せんことを欲すればなり。之を自得すれば、則ち之に居ること安し。之に居ること安ければ、則ち之に資^とる

こと深し。之に資ること深ければ、則ち之を左右に取りて、其の源に逢う。故に君子は其の之を自得せんことを欲するなり」。『祖堂集』卷二・弘忍章、「上座又た問う、上來の密語密意は只だ這个有るのみなるや、爲當更に意旨有りや。行者云く、我れ今、汝が與に説くは則ち是れ密ならず、汝若し自己の面目を自得すれば、密は却つて汝に在り」（『同』、一一八七）。

○秋水〓満々とたたえた秋の清く澄みわたった水。心の澄清なるにたとえられる。『伝灯録』卷九・滄山靈祐章、「若し如許多の悪覺・情見・想習の事無きこと、譬えば秋水の澄淨にして清淨無爲、澹泞として無礙なるが如くんば、他を喚んで道人と作し、亦た無事の人と名づく」（T五一一二六四c）。

○拂拭本無塵〓五祖弘忍の呈偈の命令に対して、神秀が呈した偈「身は是れ菩提樹、心は明鏡の臺の如し。時時に勤めて拂拭し、塵埃に染さしむること莫れ」（興聖寺本『六祖壇經』、「禪の語録4」二七頁）と、六祖慧能が呈した偈「菩提は本より樹無し、明鏡も亦た臺に非ず。本來無一物、何處にか塵埃有らん」（『同』三六頁）とを背景に持つ。

○張王季〓中国人のごく一般的な姓。『寒山詩』、「世人何事をか吁嗟可き、苦樂交も煎りて底涯勿し。生死往来すること多少の劫ぞ、東西南北するは是れ誰家ぞ。張王李趙は權時の姓、六道三途の事は麻に似たり。只だ主人の了絶せざりしが爲に、遂に遷謝を招いて迷邪を逐う」（『禪の語録13』二八一頁）。また『伝灯録』卷二〇・含珠山審哲章、「師又た一僧に問う、姓王姓張姓李は俱な是ならず、汝が本來の姓は何ぞ。曰く、和尚と同姓なり。師曰く、同姓なるは即ち従うも、本來の姓は箇什麼ぞ。曰く、漢水の逆流するを待ちて即ち道わん。師曰く、即今什麼の爲に道わん。曰く、漢水逆流するや。師乃ち休む」（T五一—三六五b）。但し「姓王姓張姓李」は、『聯灯会要』卷二五の審哲章では「張黄李趙」、「五灯会元」卷一三の審哲章では「張王李趙」。宋・朱弁撰『曲洧旧聞』卷七

に「俚語に張王李趙の語有り。猶お是れ何等人ぞと言うがことし、齒牙に挂くるに足る無きの意なり。宣和の間に王將明・張子能・王履道・李士美・趙聖從俱な政府に在り。是の時、張王李趙の語、朝野に喧すし。聞く者之を笑わざるは莫し」(『叢書集成新編』八四、一七九頁下段)とあるが、ここでは姓の代表的な例として取り上げられている。

○典拠について『普燈錄』と明記される。いま『嘉泰普燈錄』卷二一・真宗皇帝章の該当箇所をベースにして『寶藏錄』との異同を示すと次のようになる。

眞宗皇帝臨御以來、^①歴覽貝文、探頤^②祖教。乃於華嚴、曉然自得。嘗製偈曰、寂寂太虛空、湛湛^③如秋水。拂拭本無塵、不屬張王李。(Z二三七—一五二a)

大字は共通するもの、小字は『普燈錄』のみのもの。

- ①(宋) + 眞(寶藏)
- ②以 || 已(寶藏)
- ③頤 || 索(寶藏)
- ④太 || 大(寶藏)
- ⑤湛湛 || 淡淡(寶藏)

〔五九〕 宋仁宗皇帝

宋仁宗皇帝、嘗製修心頌曰、初祖安禪在小林、不傳經教但傳心。後人若悟眞如性、密印由來妙理深。 普燈錄

*

宋の仁宗皇帝、嘗て修心頌を製りて曰く、「初祖安禪して小林に在り、經教を傳えず但だ心を傳えるのみ。後人若し悟れば眞如の性なり、密印の由來は妙理深し」。

普燈錄

*

宋の仁宗皇帝は、曾つて（次のような）修心の頌を、おつくりになった。

初祖は坐禅して、少林寺においでた、

經典のテキストを伝えず、その心を伝えただけ。

後の世の人も、若し（そのことに）気付けば、（もともと）みな真実の自己、

由緒ある秘密のしるしは、（そうした）微妙な深みにある。

*

○仁宗皇帝Ⅱ一〇一〇—一〇六三。北宋第四代皇帝。在位は一〇二一—一〇六三。真宗の第六子。人となりはおもいやりがあつて孝行、ゆつたりと心が広がった。十三歳のとき即位したが、一〇三三年まで劉太后が摂政した。親政がはじまると、范仲淹・韓琦・富弼らの名臣が政治を担当し、国力が充実し文運隆盛の慶暦（一〇四一—一〇四八）の治といわれる時代が現出した。また欧陽修・司馬光・王安石などの若手の学者・政治家、周敦頤・邵雍の名儒など多くの人材を輩出した。しかし、一方では一〇三八年に李元昊が西夏を建国して国境を侵し、遼も南下せんとしたので、遼に歳幣の増額、西夏にも歳幣を贈ることと和約した。これより兵員が増加し、大軍を養うための支出が年々に増加し、国家財政を圧迫し苦しい状態となつていった。

○初祖安禪在小林Ⅱ西来した達磨が高山少林寺に至つたとするのは『伝法宝紀』をもつて嚆矢とする。そして少林寺

で面壁したとするのは『伝灯録』卷三・達磨章に次のようにいうのによる。「嵩山少林寺に寓止し、面壁して坐す。終日默然たり。人之を測る莫し。之を壁觀の婆羅門と謂う」(T五二—二九b)。「安禪」は静かにゆつたりと坐禅する、宴坐に同じ。

○不傳經教但傳心 少林で達磨に師事した慧可は何の教えも受けず、ただ安心問答によって心を伝えられたことを踏まえる。『伝灯録』卷三・達磨章、「時に僧慧光なる者有り、曠達の士なり。久しく伊洛に居り、博く群書を覽、善く玄理を談ず。毎に嘆じて曰く、孔老の教えは禮術の風規、莊易の書は未だ妙理を盡さず。近ごろ達磨大士の少林に住止すると聞く、至人は遙かならず、當に玄境に造るべし。乃ち彼に往きて晨夕に參承す。師は常に端坐面牆して誨勵を聞く莫し。光自ら惟いて曰く、昔の人は道を求めんとして骨を敲きて髓を取り、刺血して饑を濟い、布髮して泥に掩い、崖に投じて虎を飼えり。古すら尚お此の若し、我れ又た何人ぞや。其の年の十二月九日夜、天大いに雪雨る。光は堅く立ちて動かず。遲明に積雪して膝を過ぐ。師、憫みて問うて曰く、汝久しく雪中に立つは當た何事をか求む。光、悲涙して曰く、惟だ願わくば和尚慈悲もて甘露門を開き廣く群品を度わんことを。師曰く、諸佛の無上の妙道は、曠劫に精勤して、行じ難きも能く行じ、忍ぶに非ざるも忍ぶ。豈に小徳小智の輕心慢心を以て眞乘を冀わんと欲するをや。徒に勤苦を勞すのみ。光は師の誨勵を聞きて、潛かに利刀を取ちて左臂を斷ちて師の前に置く。師は是れ法器なるを知りて乃ち曰く、諸佛は最初道を求めて法の爲に形を忘る。汝今臂を吾が前に斷つ。求むること亦た可なる在り。師は遂に因りて名を易えて慧可と曰う。光曰く、諸佛の法印は聞くを得べきや。師曰く、諸佛の法印は人に従つて得るに匪ず。光曰く、我が心未だ寧からず、乞う師與に安んぜよ。師曰く、心を將ち來たれ、汝が與に安んぜん。曰く、心を覓むるに得るべからず。師曰く、我れ汝が與に心を安んじ竟る」(T五二—二九b)。

○眞如性 〓 空而不空なる諸法の法性。興聖寺本『六祖壇經』卷下・說摩訶般若波羅蜜門、「此の法を悟らば、即ち是れ無念無憶無着にして、誑妄を起さず、自らの眞如の性を用いて、智慧を以て觀照し、一切法に於て取らず捨てず、即ち是れ見性して佛道を成ずなり」(『禪の語録4』一〇二頁)。「頓悟入道要門論」卷上、「又た問う、眞如の性は爲た實に空なりや、爲た實に不空なりや。若し不空と言わば即ち是れ有相なり。若し空と言わば即ち是れ斷滅なり。一切衆生、當に何に依りて修して解脱を得べし。答う、眞如の性は亦た空亦た不空なり。何を以ての故に。眞如の妙體は無形無相、不可得なり、是れを亦た空と名づく。然れども空無相體中に於て恆沙の用を具足し、即ち事として應ぜざるは無し、是れを亦た不空と名づく」(『禪の語録6』九二頁)。

○密印 〓 達磨の密伝した心印。「三〇」の「祖師西來密傳心印」の注を参照。『伝灯録』卷一・仰山章、「滄山の密印を受けるに暨およんで、衆を領して王莽山に住すも、縁化未だ契わず」(T五一一二八二c)。

○妙理 〓 微妙不可思議なる理法。『伝灯録』卷五・慧能章、「尼の無盡藏なる者は即ち志略おぼの姑なほなり。常に涅槃經を讀む。師は暫く之を聽き、即ち爲に其の義を解説す。尼は遂に卷を執りて字を問う。師曰く、字は即ち識らず、義即ち問わんことを請う。尼曰く、字すら尚お識らず、曷なんぞ能く義を會せん。師曰く、諸佛の妙理は文字に關わらず。尼驚きて之を異とす」(T五一―三三五b)。

○典拠について 〓 『普灯録』と明記される。いま『嘉泰普灯録』卷二一・仁宗皇帝章の該当箇所をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようになる。

仁宗皇帝……(中略)……嘗製修心頌曰、初祖安禪在少林、不傳經教但傳心。後人若悟眞如性、密意③由來妙理深。
(Z 一三七一―一五二b)

大字は共通するもの。

①(宋) 十仁(宝蔵) ②少||小(宝蔵) ③意||印(宝蔵)

この仁宗の頌は『伝法正宗論』卷下・第四篇及び『祖庭事苑』卷一「教外別伝」の項、『嘉泰普灯録』卷一
一・仏鑑恵勸章にも見えるが、そこでは③の「意」は「印」となっている。

〔六〇〕 宋高宗皇帝

宋高宗皇帝、詔圓悟禪師至闕下。上曰、朕亦知師禪道高妙、可得聞乎。勤曰、陛下以仁孝理天下。率土生靈、咸被光澤。雖草木昆蟲、各得其所。此佛祖所傳之心也。此心之外、無別有心。若別有心、非佛祖之心矣。上大喜曰可、賜圓悟禪師號。

普燈録

*

宋の高宗皇帝、圓悟禪師に詔して闕下に至らしむ。上曰く、「朕亦た師の禪道の高妙なるを知る、聞くを得べきや」。勤曰く、「陛下は仁孝を以て天下を理おさむ。率土の生靈は咸な光澤を被る。草木昆蟲と雖も、各おの其の所を得う。此れ佛祖傳うる所の心なり。此の心の外に、別に心有る無し。若し別に心有らば、佛祖の心に非ず」。上、大いに喜びて「可なり」と曰いて、圓悟禪師の號を賜う。

普燈録

*

宋の高宗皇帝は、円悟禪師に勅を下して、おそば近くに召された。

上 朕はひとえに、禪師が禅の道を極め、高く秀でて知っているのを知っている、(そのの処を)ひとつ聞かせてくれないか。

勤 陛下は仁と孝によって、天下を治めていられます。国土の果てまで、生きとし生けるもの、すべてが皇恩に浴しています。(地をはう)草木や昆虫まで、夫々に棲家を得ています。それが仏祖の伝えた心なのです。(陛下の)心以外に、別に(仏祖の)心があるわけではありません。もしも(陛下の仁と孝以外に)特別の心があるなら、仏祖の心ではございませんぞ。

上は満足して、「よし」と言われ、円悟禪師の号を賜わった。

*

○高宗皇帝 一一〇七—八七。南宋の初代皇帝。在位は一一二七—六二。北宋第八代皇帝徽宗の第九子。第九代皇帝欽宗の異母弟。一一二一年に康王に封ぜられた。一一二六年、金に首都開封を攻め落され、翌年に徽宗・欽宗らの宗室や官僚ら数千人が金の捕虜となって拉致されて北宋は滅亡した。しかし、この難を免れた康王が群臣に推戴されて南京で即位し、金軍と戦い各地に起った反乱を平定した。一一三八年臨安(浙江省杭州)に遷都し、金と講和を結んで平和を回復した。これによって金の支配を逃れた漢人が南下して人口が増加し、開発が進められて経済が豊かとなり、国家が建て直された。一一六二年、養子の孝宗に譲位して太上皇帝と称した。

○圓悟禪師 一一〇六—一一三五。臨濟宗楊枝派。楊枝方会—白雲守端—五祖法演—圓悟克勤と師承し、大慧宗杲・

虎丘紹隆など百余名の法嗣を打ち出した。彭州崇寧縣（四川省彭縣崇寧）の人、俗姓は駱、家は代々儒を業とし、一日に千言を記憶したといわれる。若くして成都の文照に従って出家し、勉学に励んで高弟となり、敏行より楞嚴經を授った。しかし、瀕死の病にかかって、「諸佛涅槃の正路は文句中に在らず」ことを悟って真覺勝禪師の法席に入った。真覺より臂を刺して流れ出た血を曹溪の一滴として示され、蜀を出、玉泉皓・金鑿信・大滄哲・黃龍晦堂心・廬山綏に見えて皆に法器と称えられた。最後に龍舒（安徽省）の法演に参じたところ、機用を尽したが肯つてもらえず、腹を立てて立ち去る。しかし反省して法演のもとに帰り侍者僚に入った。たまたま蜀に帰る役人が参じて法演に「仏法の大意」を問うに、「頻りに小玉を呼ぶは元より事なし、只だ檀郎の声を認得せんことを要すのみ」と小艶詩を引いて答えたのを聞いて大悟した。法演の五祖山（湖北省蕪春県）に移るのに従い首座となった。崇寧中（一一〇二—一〇六）に郷里に帰ったところ、成都の太守の郭知章の請により六祖院に初住し、更に昭覺寺に住すると八年。政和の間（一一一一—一八）に再び蜀を出、荆南に到ったとき、無尽居士張商英に留められて碧巖寺（澧州夾山）に入り、また長沙の道林寺に住し、鄧子常の奏上によって仏果の号を賜わった。政和中、詔勅によって金陵の蒋山太平興国寺、東京の天寧万寿寺に住した。建炎初（一一二七）、金山龍游寺に遷り、入対して圓悟禪師の号を賜わり、改めて廬山雲居寺に入った。久しくして蜀に帰り、再び昭覺寺に住し、紹興五年（一一三五）八月八日示寂。寿七十三、僧臘五十五。翌年に塔が建ち、塔号を靈照と賜わり、真覺と諡された。語録としては『圓悟仏果禪師語録』二〇卷、『圓悟勤禪師語』（『続開古尊宿語要』日集）、『仏果圓悟禪師心要』『碧巖録』『擊節録』がある。伝記を録するものとしては『圓悟禪師伝』（『鴻慶居士集』卷四二）が第一資料。他に『聯灯会要』卷一六、『普灯録』卷一一、『五灯会元』卷一九、『僧宝正統伝』卷四などがある。

○高妙ますぐれている。『文選』卷五二・魏文帝「典論論文」、「孔融は體氣高妙にして、人より過る者あり」。

○仁孝Ⅱ『漢書』卷四三・叔孫通伝第二三、「今、太子は仁孝なること、天下皆な聞く」。

○率土生靈、咸被光澤Ⅱ『詩経』小雅・北山、「普天の下、王土に非ざる莫し。率土の濱^{ほと}まで王臣に非ざる莫し」。

『晋書』卷一二四・慕容盛・載記二四、「生靈は其の徳を仰ぎ、四海は其の仁に歸す」。

○草木昆蟲、各得其所Ⅱ『漢書』卷一〇・成帝紀、「詔して曰く、蓋し聞く、天は衆民を生み、相い治むること能わずして、之が爲に君を立て以て之を統理す。君、道得なるときは則ち草木昆蟲咸な其の所を得。人君徳ならずんば、^{つみ}謫天地に見われ、災異^{しばし}婁^{しほ}ば發り、以て治まらざるを告ぐ」。

○典拠についてⅡ『普灯録』と明記される。いま『嘉泰普灯録』卷二二・高宗皇帝章の該当箇所をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようになる。

高宗皇帝^①……（中略）……二年即皇帝位、未幾幸維揚。十一月詔勤^②詣行在、引對至闕下。上遣中使八人翊之、賜座。上曰、朕一一記得、昨過泗洲、見普照佛心長老、稱是師弟子。朕亦素知師禪道高妙、可得聞乎。勤曰、陛下以仁孝治^③天下。率土生靈、咸被光澤。雖草木昆蟲、各得其所。此佛祖所傳之心也。此心之外、無別有心。若別有心、非佛祖之心矣。上大喜曰可、賜圓悟禪師號。勤謝畢。（Z一三七—一五二d—一五三a）

大字は共通するもの、小字は『普灯録』のみに見えるもの。

①（宋）十高（宝蔵） ②勤Ⅱ圓悟禪師（宝蔵） ③治Ⅱ理（宝蔵）

〔六一〕 宋孝宗皇帝

宋孝宗皇帝詔僧惠遠、住持靈隱禪寺。上舉不與萬法爲侶者問遠、是什麼人語。遠以龐居士奏之。上曰、前日靜坐、忽

思向所舉不與萬法爲侶因緣、朕從這裏、有箇見處。遠曰、不與萬法爲侶、陛下作麼生會。上曰、四海不爲多。遠曰、一口吸盡西江水、又且如何。上曰、亦未曾欠缺。

又賜佛照禪師手詔曰、今俗人乃以禪爲虛空、以語爲戲論、其不知道也如此。茲事至大、豈在筆下可窮。聊敘所得耳。

普燈普鑑等錄

*

宋の孝宗皇帝、僧惠遠に詔して、靈隱寺に住持せしむ。上、萬法と侶たらざる者を舉して遠に問う、「是れ什麼人の語ぞ」。遠は龐居士を以て之を奏す。上曰く、「前日靜坐せしに、忽トキまち向に舉する所の萬法と侶たらずの因縁を思ひ、朕は這裏従り箇の見處有り」。遠曰く、「萬法と侶たらず、陛下は作麼生か會す」。上曰く、「四海も多きと爲さず」。遠曰く、「一口に西江の水を吸い盡すこと、又た且く如何」。上曰く、「亦た未だ曾て欠缺せず」。

又た佛照禪師に手詔を賜いて曰く、「今俗人は乃ち禪を以て虛空と爲し、語を以て戲論と爲す。其れ道を知らざることも也た此の如し。茲の事は至大にして、豈に筆下の窮むべきに在らんや。聊か得る所を敘ぶるのみ」。普燈普鑑等錄

*

宋の孝宗皇帝は、禪僧の慧遠をお召しになり、靈隱寺の住持とならせた。

上は「萬法ト侶タラザル者」をとりあげて、遠にきかれた、どういふ男の言葉であらう。

遠は「龐居士」の名を、奏上した。

上 (朕は) 昨日、静坐して、ふと前にとりあげた「万法ト侶タラザル」(者という) 話を思い起して、朕はそこから一つの見解を得たぞ。

遠 万法ト侶タラザル者を、陛下はどのように会得されましたか。

上 四海(の水)も、多すぎはせん。

遠 一口に西江の水を呑み尽す処を、それではいったい、どうなされます。

上 やはり一度も、欠け尽きたことなどないぞ。

さらに、仏照禪師に親しく(次のような) 勅書を下された。

今の俗物どもときたら、禪仏教を虚無だとおもい、テキストを戯語と考えている。

彼らが道を知らざること、全くこのありさまだ。

とことん偉大なるものが、どうして筆で書き尽せる限りであろう。

仮りそめに、我が思うところを叙べてみるだけのこと。

*

○孝宗皇帝 一一二七—九四。南宋第二代皇帝。在位は一一六二—八九。太祖七世の孫。高宗に子がなく、養子に迎えられて太子となり、一一六二年帝位についた。金との屈辱的な関係を回復し、政治改革が進められ、南宋第一の英主といわれる。朱熹・陸象山が出て「性理の学」が起り、学術が盛んとなり、都市経済・文化が発達し、南宋の

極盛期を現出した。一一八九年、子の光宗に讓位した。宋代随一の好學崇仏の天子で、靈山子琳、天竺若訥（一一〇―九二）、仏海慧遠、仏照徳光、別峰宝印（一一〇九―九〇）等の多くの禪僧を入内説法せしめ、『御註円覚經』（Z一五）、『原道論』（T四九―四二九c、六九二c、八九六a）を著している。『嘉泰普灯録』卷二二、『仏祖統紀』卷四七、『仏祖歴代通載』卷二〇、『釈氏稽古略』卷四、『仏法金湯篇』卷一四、『仏海慧遠禪師広録』卷二に「仏海禪師入内陞座録」があり、『古尊宿語録』卷四八に「仏照禪師奏対録」がある。論文に石井修道「孝宗（南宋）と禪宗」（『宗学研究』二四号）がある。

○惠遠 一一〇三―七六。眉州（四川省眉山県）の人、姓は彭氏、世々儒を業とする。十三歳のとき兄の出家するを見て、自らも薬師院の宗弁に従って出家し、成都の大慈寺で経論を勉学すること四年。次いで峨眉山靈巖寺の徽禪師に参すること二年、所悟あつて徽に印可されるが釈然としなかつた。成都昭覚寺に圓悟禪師の住するを聞いて趨き、その普説を聞くや豁然と頓悟し、衆中に仆れたところを抱き起され、「吾が夢覚めり」と言う。これ以後、機鋒峻発にして鉄舌とあだ名された。紹興乙卯（一一三五）圓悟の示寂により淮南に進出し、龍蟠山寿聖寺に出世し、一年にして琅琊山開化寺に移る。また婺州（浙江省）の普濟寺・衢州（浙江省）の定業禪院・光孝禪院に移住し、十年を経て南岳南台禪院に移り、さらに天台の護国・国清・鴻福の三寺を歴住した。乾道五年（一一六九）臯亭山崇先寺に勅住し、六年（一一七〇）に靈隱寺に開堂した。孝宗はしばしば入内せしめて問答し、仏海禪師の号を賜わつた。淳熙三年（一一七六）正月二十五日示寂、寿七十四、僧臘五十九。叡山の僧であつた覚阿（一一四三―？）は承安元年（一一七二）に入宋して仏海惠遠に参すること三年、その法を得て臨濟宗楊岐派の禪を日本に伝えている。また栄西『興禪護国論』未来記に、博多の張安国なる者が語つた、仏海禪師の「我が滅度の後二十年、……東漸の佛法は日域に到らざらんや」という予言にこたえる者は、己をおいて他にないことを力説している。

周必大撰「靈隱仏海禪師遠公塔銘」（『省齋文稿』卷四〇、中国仏寺志²⁴『増修雲林寺志』卷五所収）が伝記の第一資料。他に『嘉泰普灯録』卷一五、『五灯会元』卷一九、『大明高僧伝』卷五、『続伝灯録』卷二八等に略伝及び語句を録す。また『仏海暄堂禪師広録』四卷（Z一二〇）がある。

○靈隱禪寺 浙江省杭州市钱塘県西湖の西二キロ、靈隱山麓にある。東晋咸和元年（三二六）、天竺僧慧理がこの地を訪れ、山の秀麗なるを見、靈鷲山の飛来したものととして、山を飛来峰と名づけ、寺を創建して靈隱寺と名づけたのが始まりとされる。唐の会昌の排仏によつて廢絶したが、建隆元年（九六〇）に忠懿王が復興し、第一世に永明延寿を迎えた。景德四年（一〇〇七）に真宗より景德靈隱寺の号を賜わった。南宋のとき杭州が国都となり、五山十刹の寺として大刹となり、一一五八年に大慧宗杲が入寺開堂し、一一七〇年勅によつて慧遠が住した。仏照徳光・松源崇岳・大川普済などが歴住し、普済のもとで『五灯会元』が編集されている。清代の一六八九年に康熙帝より雲林寺の名を賜わった。『武林靈隱寺志』八卷、『増集雲林寺志』八卷、『雲林寺統志』八卷がある。

○不與萬法爲侶者 一切の存在と無関係のもの、それは一切の思慮・表現をうけつけぬ。龐居士が馬祖に参じたときの問いとして有名である。『祖堂集』卷一五・龐居士章、「因に馬大師に問う、萬法と侶たらざる者、是れ什摩人ぞ。馬師云く、居士の一口に西江水を吸い盡すを待ちて、我れ則ち你が爲に説かん。居士便ち大悟す」（『禅学叢書之四』、四一—四四）。『龐居士語録』では、馬祖に参する前に石頭に同じ問いを發して、口を手でふさがれている。

○龐居士 ？—八〇八。諱は蘊、字は道玄、衡陽（湖北省）の人、家は代々儒業を修めていた。妻と一男一女があり、竹細工を作つて売りながら、日々の生計を立てていた。丹霞と共に長安に科擧を受けに行く途中、一人の行脚僧に会い、「選官は選仏に及ばない」と教えられ、禪に志すようになる。貞元元年（七八五）、石頭と馬祖に参じて大悟し、二年間、馬祖の門下にとどまつて悟後の修行を積むが、「了事の凡夫」として一生在家のままですごす。元和

初年（八〇六）に襄陽に移り住み、そこで節度使として在任中の于頔の帰依を受ける。示寂の年は『祖堂集』に日蝕の日に寂したとすること、于頔の襄州刺史在任期間等を勘案して、元和三年（八〇八）七月一日と推定されている。丹霞、齊峰、百靈、普齊等の多くの禪者と交わり、その問答は常に緊張度の高い第一級のものとなっている。その言葉を重んずる独自の機鋒や、悟境の熟成度から、震旦の維摩と称されている。後世への影響は広範で、禪者はいうにおよばず、士大夫、儒者、詩人にまで及び、画題となり、元曲の題材となり、唐末から明末の時代まで、彼の名は記憶され続けた（『馬祖の語録』八六頁より載録）。『祖堂集』卷一五、『伝灯録』卷八、『宗門統要』卷三、『聯灯会要』卷六などに伝を録し、節度使于頔（？—八一八）の編集した『龐居士語録』がある。

○静坐ニ静かに坐って心身を落ちつけること。仏家の坐禅になぞらえて道学において実践的学問方法として取り入れられた。北宋の周濂溪（一〇一七—七三）に始まる主静主義は心の本源である未発（心が動かぬ静の状態）を養うことよって已発（心が情・思慮として発動した状態）のときの正当さを保証しようとするもので、静坐が具体的修行法として提唱された。濂溪の弟子である程明道や程伊川らはみな静坐を重視し、二程子の門下では楊龜山が静坐による心の涵養を最高の修行法とみなし、これが羅子章—李延平をへて朱子に伝えられた。三浦国雄『朱子』二六頁参照（『人類の知的遺産19』、講談社）。朱子は「静坐は是れ坐禪入定の如く思慮を斷絶せんことを要すに非ず、只此の心を收斂し、閑思慮に走作あつかする莫くんば、則ち此の心は湛然として無事、自然に專一たり。其れ事有るに及んでは則ち事に随つて應じ、事已めば則ち復た湛然たり」（『朱子語録』卷二二）と言ひ、禪家の意識を滅する坐禪入定に落ち込まぬ動静一如の静坐を提唱する。

○未會欠缺ニ心水はいくら呑んでも欠缺することはない。『祖堂集』卷一四・馬祖章、「師、僧に問う、什摩處よりか來たる。對えて云く、淮南より來たる。師云く、東湖、水滿てるや。對えて云く、未だし。師云く、如許多時の

雨なるに、水尚お未だ満たず。道吾云く、満てり。雲岳云く、湛湛底。洞山云く、什摩の劫中にか曾て欠小し來たる」(『禅学叢書之四』、四一四二)。

○又賜佛照禪師手詔曰……これ以下は仏照禪師が淳熙七年(一一八〇)五月三日に召されて説法した後に御製を賜わったものである。淳熙三年(一一七六)より紹熙四年(一一九三)の孝宗崩御の前年に及ぶまで入内して問答説法した記録である『仏照禪師奏対録』(『古尊宿語録』卷四八)に収められており、「手詔」のみ『人天寶鑑』に別出している。仏照禪師とは仏海慧遠に次いで靈隱寺第七世となつた育王徳光の賜号。仏照禪師育王徳光(一一二二—一二〇三)の伝は周必大撰「圓鑑塔銘」(『平園統稿』卷四〇へ四庫全書珍本第二集)、『増修雲林寺志』卷五へ中国仏寺史彙刊第一輯第二四冊)が第一資料。元代の編であるが、塔銘及び現在に不伝の語録に依つていと思われる『仏祖歴代通載』卷二〇がそれに次ぐ。他に『聯灯会要』卷一八、『五灯会元』卷二〇、『大明高僧伝』卷六等がある。諱は徳光、姓は彭氏。臨江軍新喻県(江西省分宜県新余市)の出身。十歳のときに両親を失い伯父に育てられる。二十三歳、同邑の光化禪院の足庵普吉に依りて出家し、発明したという(『聯灯会要』『五灯会元』)。普吉が閩(福州)に帰つて西禅に入ったとき、東禅の月庵善果(一〇七九—一一五二)に従うよう命ぜられ、服勤すること三年。閩中の善知識に歴参し、また江西百丈の道震、饒州天寧の應庵曇華(一一〇三—一六三)に謁すも自肯せず、大滄山に住した善果に再び従つたが、善果は紹興二二年(一一五二)に示寂する。そこで江西に帰り、雲巖の典牛天游、円通の万庵道顔(一〇九四—一一六四)に謁した。たまたま廬山の東林寺に移住した曇華に再び従い、婺州の宝林寺にも従つた。一一五六年、四明の阿育王山に住した大慧に参謁し、大悟徹底する。大慧示寂(一一六三)の後、仰山に分坐するが、乾道三年(一一六七)、台守の李浩に請われて鴻福に住し、閲すること五年、光孝寺に徙る。郡城の大火とともに寺も焼失するが泉州に渡つて喜捨を募り、殿宇を一新した。淳熙三年(一一七六)、詔勅により靈隱寺に開

堂說法し、その冬、召されて觀堂に入り、五昼夜留められて奏対し、仏照禪師の号を賜わった。七年（一一八〇）明州阿育王山に処らしめられ、紹熙四年（一一九三）、徑山に住持せしめられたが、慶元元年（一一九五）育王山の東庵に帰老を許された。嘉泰三年（一二〇三）示寂、東庵の後に塔され、普慧宗覺大禪師と勅諡され、塔名を圓鑑という。

『圓鑑塔銘』に語録を存したことをいうが、今に伝わらない。入内して孝宗に対して行つた説法問答集である『仏照禪師奏対録』が存す。また一一八九年大日能忍が弟子二人を使わして書を育王徳光に差し出して所悟を呈して印可を得、日本達磨宗を興したことは特筆されよう。石井修道「仏照徳光と日本達磨宗（上）（下）」（『金沢文庫研究』第二〇巻第一一号第一二号、一九七四年一月、一二月）参照。

○以禪爲虚空〓ここでは虚空は実体なき仮空のものの喩えで、ネガティブな意味で使われている。『入楞伽經（一〇卷本）』卷四、「虚空と兎角、及および石女の兒の如く、無にして有と言説し、是の如く妄りに分別す」（T一六一五三四c）。なお虚空のもつ属性について論じたものに入矢義高「空と浄」（『求道と悦楽』所収、岩波書店）がある。

○典拠について〓『普灯普鑑等録』と明記されている。嘉靖十年智異山鐵窟開刊本は「普燈録及寶鑑録」とする。いま『普灯録』卷二二・孝宗皇帝章の該当箇所をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようになる。

孝宗皇帝……（中略）……乾道庚寅冬、景德靈隱寺虚席。詔僧慧遠住持。^①辛卯春召見。上舉不與萬法爲侶問遠、是甚麼人語。遠以龐居士奏之。語繁不録。壬辰秋召入東閣。上曰、前日在此閣、靜坐忽思、向所舉不與萬法爲侶因縁、朕從這裏有箇見處。遠曰、不與萬法爲侶、陛下作麼生會。上曰、四海不爲多。遠曰、一口吸盡西江水、又且如何。上曰、亦未曾欠缺。繼賜佛海禪師。（Z一三三七—一五三c、d）

大字は共通するもの、小字は『普灯録』にのみあるもの。

- ① (宋) 十孝 (宝蔵) ② 慧二惠 (宝蔵) ③ 持十 (靈隱禪寺) (宝蔵) ④ 侶十 (者) (宝蔵)
 ⑤ 甚二什 (宝蔵)

「又賜佛照禪師手詔曰……聊敘所得耳」は『普灯録』になく、『宝(普)鑑録』に基づくものと思われる。宝鑑といえはすぐに『人天宝鑑』(一二三〇年成立)が想起される。今その『人天宝鑑』を見ると、本話の後半部、即ち「賜佛照禪師、手詔曰、……聊敘所得耳」が収録されている。そこで『人天宝鑑』をベースにして『宝蔵録』との異同を示すと次のようになる。

孝宗賜佛照禪師手詔曰、禪師所奏菩薩十地、乃是修行漸次、從凡入聖。夫復何疑。方知腳踏實處、十二時中、曾無間斷、以至圓熟。雜染純淨、俱成障礙、作止任滅、脫此禪病。當如禪師之言、常揮劒刃、卓起背梁、發心精進、猶恐退墮。每思到此、兢兢業業、未嘗敢忽。今俗人乃以禪爲虛空、以語爲戲論、其不知道也如此。茲事至大、豈在筆下可窮。聊敘所得爾。^② (乙一四八一六七c)

大字は共通の文字、小字は『人天宝鑑』に見える文字。

- ① (又) 十賜 (宝蔵) ② 爾二耳 (宝蔵)

このように『宝蔵録』は『人天宝鑑』によく一致する。恐らく『宝鑑録』とは『人天宝鑑』のことを指していると思われる。底本(万歴三九年智異山能仁庵刊本)が『普鑑録』とするのは「宝」を「普」に錯つたものであろう。

〔六一二〕高麗太祖神聖大王

高麗太祖神聖大王、崇信禪法。自製興法王師碑云、蓋聞微言立教、始開鷲嶺之禪、妙旨傳心、終入雞山之定。雖曰別

行法眼、竊惟同稟玄精。慶喜於是當仁、和脩以其嗣位云云。初聞圓覺、東入梁朝、始見大弘、北遊魏室。於是師資所契、付囑同風。祖法相承、心燈不絕。所以一花歛現、六葉重榮。近自江西、流於海裔。亦有鳳林家子章敬曾孫、惟我大師、再揚吾道者焉云云。世宗之遇摩騰、梁武之逢寶誌、無以加也。生生世世、永修香火之因、子子孫孫、終表奉持之至。所以重起其興法禪院、以住持云云。因覓五百禪院。

海東興法寺碑

*

高麗太祖の神聖大王、禪法を崇信す。自ら興法王師の碑を製して云う、「蓋れ聞けり、微言もて教を立て、始めて鷲嶺の譚を開き、妙旨もて心を傳えて、終に雞山の定に入る、と。法眼を別行すると曰うと雖も、竊かに惟みれば同じく玄精を稟く。慶喜は是に於て仁に當り、和脩は以て其れ位を嗣ぐ云云。初めて圓覺を聞きしは、東して梁朝に入りしときにして、始めて大弘に見うは、北のかた魏室に遊びしときなり。是に於て師資所契し、同風を付囑す。祖法相承して心燈絶えず。所以に一花歛として現われ、六葉重榮す。近くは江西より海裔に流る。亦た鳳林の家子にして章敬の曾孫有るも、惟だ我が大師のみ吾が道を再揚する者なり云云。世宗の摩騰に遇い、梁武の寶誌に逢うも、以て加うる無し。生生世世、永なえに香火の因を修し、子子孫孫、終りまで奉持の至を表わす。所以に其れ興法禪院を重起し、以て住持せしむ云云。因りて五百禪院を覓す。

海東興法寺碑

*

高麗の大祖神聖大王は、深く禪仏教をあがめて、自から（次のような）興法王師の碑をおつくりになった。

朕が聞くところ、奥深い教えがテキストにとりあげられて、始めて鷲の山の御説法が始まり、微妙な意旨が胸に伝わって、終に鷄足山で禪定に入った。教と禪が別に正法の眼をひろげたというよりは、よくよく考えてみると、共に幽玄の精神をうけてのことである。阿難はそういうわけで、仁に当って師にゆずらず、商那和修はそういうわけで、（阿難の）後をうけてしかじか。

やがて聞くところ、円覚大師（達磨）が東に來られて、梁のくにつくや否や、大弘（慧可大師）を見つけ、北のかた魏朝に出かけられて、そういうわけで師と弟子（の呼吸）がびたりと合って、あとをたのんで風（の道）を同じくし、祖師の心をうけつぎ、仏心の灯が絶えない。それというのも、（達磨の）花が一本、俄かに開くと、六枚の花弁、重なって盛えたのである。近くは江西より東海のはてまで流れて、我が鳳林の家族、章敬の孫弟子たちがいる。おそれながら、我が（興法王）大師が、再び我が仏の道を興されたお方でしかじか。漢の世宗（明帝）が摩騰にであい、梁の武帝が宝誌にであったのも、これ以上のものであるまい。我が生の続く限り、長く香火の種子をそだて、子より孫へとくりかえして、久しく祭祀の礼を尽すべく、そういうわけで重ねて興法禪院を建て、そこに（正法を）住持させるとしかじか。

よって、五百の禪院を設ける。

*

○高麗太祖神聖大王 〓 八七七—九四三。姓は王、名は建。高麗王朝第一代の王。在位は九一八—四三。神聖大王は太

祖王建の諡。新羅末の大動乱のなかで弓裔の武將として多くの武功を立て最高幹部となり、九一八年に諸將におされて王となり、高麗を建国した。以後も新羅、後百濟、諸豪族と抗争を続け、九三五年に新羅が下り、翌年に後百濟を十万の軍をもって攻撃して滅ぼし半島を統一した。太祖は新羅の制にならって体制を整備し、人民の帰農を勧めた。また国運の隆盛を願って仏教を国教として深く帰依し、多くの寺塔を建立し、仏事を行った。『高麗史』世家第一・第二。

○興法王師碑Ⅱ「高麗国原州靈鳳山興法寺真空大師忠湛塔碑」のこと。『海東金石苑』卷三、『全唐文』一〇〇〇、『朝鮮金石総覧』に収録されている。『海東金石苑』卷三の「興法寺忠湛塔碑」に付されている説明によれば、「天福五年（九四〇）五月、高麗太祖王建が碑文を製し、崔光允が唐の太宗の書より文字を集め、塔を原州靈鳳山興法寺に建てた。明の万曆三年（一五七五）に倭寇の患に遭い、倭奴がこの碑を車に載せて東行し、竹嶺に至って碑を二つに割り、半分を持ち去った。乱が終つて後、原州にもどしたが、残石二片が存するだけで、人々は半折の碑と称した」とある。

忠湛（八六九—九四〇）は咸通一〇年（八六九）に生まれた。俗姓は金氏。幼くして父母をなくし、父の友人であった長純禪師に従つた。龍紀元年（八八九）武州靈神寺で受戒し、相部を学び、毘尼を精究した。道を論じて学人に言う、「淺溜、石を穿ち、同心、金を斷つ。鑽燧の勤、寫瓶の易。皆な微を積むに由る。跬歩するを已めずして過ば征けば俄まち學海の功を成せん」と。後に入唐し、雲蓋禪宇に登り、淨円大師を虔礼す。大師は雲壑の居に棲し、石霜の印を佩す。天祐十□年六月中に海東に帰る。太祖は王師の礼を以てし、学人は霧の如く集まり、弟子は五百人なり。天福五年（九四〇）七月十八日、門人に告げて言う、「萬法は皆な空なり、吾れ將に去らんとす、一心を本と爲し、汝等勉旃せよ」と。顔貌常の如く、寂然として坐化す。また、「惟みるに大師は、雪山に成道し、煙洞に

證心してより、十八代の祖宗を傳え、三千年の禪教を統ぶ」とあり、石霜を如来より十八代の祖としているのは、神会の西天東土十三祖説を承けるものとして注意を引く。

興法寺については不詳だが、「原州興法寺廉巨和尚塔誌」（『朝鮮金石総覧』）があり、「會昌四年歲次甲子、季秋之月兩旬九日遷化、廉巨和尚塔去、釋迦牟尼入涅槃一千八百四年矣」とある。廉巨和尚は道義に嗣いだ廉居禪師のこと。

〔参考〕葛城未治『朝鮮金石攷』（大阪屋号書店、京城、昭和一〇年）にこの碑に関する詳しい記事があり、以下に転載する。

四〇 原州興法寺真空大師塔碑

此の碑は俗に原州の半折碑と稱せられ、碑文の文字は唐太宗の字を集刻してあるので、特に著名な貞石であつて、夙に世人の注意を惹いたものである。

碑は江原道原州郡地正面安昌里靈鳳山興法寺址に在つて、螭首があり龜趺の上立つて居たが、碑身は倒潰して一時所在を失うたが、後ち之を發見し往年之を郡治に移し、次いで大正二年更に斷石四片を朝鮮總督府に取寄せ、今景福宮の勤政殿の廡廊に陳列してある。

殘闕の斷石は碑身の上部と下部とに當り中部を喪つてゐる。上部の石は縦二尺六寸・横三尺三寸五分で下部の石は縦二尺七寸・横三尺七寸である。

此の碑に就いては、李齋賢の櫟翁稗説（後集一）に、

北原（原州）興法寺碑。我太祖親製其文。而崔光胤集唐太宗皇帝書。模刻于石。辭義雄深偉麗。如玄圭赤鳥揖讓廊廟。而字大小眞行相間。鸞漂鳳泊。氣吞象外。眞天下之寶也。

とあり、又東國輿地勝覽〔卷四十六〕原州牧佛宇の條に、

興法寺。〔在建登山。寺有碑。高麗太祖親製其文。命崔光胤。集唐太宗書模刻。李齋賢嘗曰。辭義雄深偉麗。如玄圭赤鳥。揖讓廊廟。而字大小眞行相間。鸞漂鳳泊。氣吞象外。眞天下之寶也。〕

とあるが、輿地勝覽の撰進せられた朝鮮成宗十一年庚子（皇紀二二四〇年・西曆一四八〇年）の頃には寺も存し、碑も亦あつたものと想像せられる。次いで大東金石書には、

興法碑。〔在原州建登山〕興法寺眞空大師碑。〔唐文皇集字〕麗太祖文。崔光胤集字。石晉高祖天福五年庚子立。麗大祖二十三年也。〔陰記無名氏〕

と載せられてゐる。

眞空は羅末麗初の名僧であつて、法諱は忠湛、俗姓は金氏其の先は鷄林の冠族で新羅景文王九年一月一日の誕生である。殊相があり幼にして戲言がない。夙に父母を失ひ父の友なる長純禪師に従うて出家し、新羅眞聖王三年齡二十一で具足戒を武州（全羅南道光州）の靈神寺で受けた。

後ち唐に遊學し雲蓋禪宇に詣り、淨圓大師に虔禮し、久しく禹穴の旁に栖んで聖典を窮ひ、燕臺の畔に至つて靈蹤を覽、新羅孝恭王の時歸還した。新羅神徳王は深く之を尊信し内殿に迎へ、王師の禮を以て待ち清淨精廬に居らしめた。

高麗太祖二十三年の庚子、齡七十三にして示寂した。遷化に臨み門人に告げて曰はく、萬法皆空一心以て本と爲す。汝等施を勉めよと。

太祖訃を聞いて慟懷し眞空大師と諡した。惜しいことは碑身の中部を喪うてゐるので生前に於ける太祖との關係が不明であり、又塔名も何と賜うたか明かでない。

碑を豎てた年時は碑文の年號・年次の所が缺けて不明であるが、高麗史世家太祖二十三年の條に、

秋七月王師忠湛死。樹塔于原州靈鳳山興法寺。親製碑文。

とあり、大東金石書・海東金石苑其の他の諸書は豎碑の年時を晉高祖天福五年とし之に従うてゐる。太祖二十三年庚子（皇紀一六〇〇年・西曆九四〇年）に當り、即ち大師の歿年に樹てたのである。

碑文は前記の如く高麗太祖の親撰に係り、崔光胤に命じて唐太宗の字を集刻せしめた。恰かも下部斷石の傍に「臣崔光胤 奉教集 太宗文□」の文字が残つて居る。太宗文皇帝とあつたものと思ふ。崔光胤は即ち崔仁滾の子である。字徑六分乃至一寸、行書であつて筆意暢達儁妙である。

唐の太宗は貞觀の治と謳はれた支那歷代中の明天子であつて、王羲之の書風に私淑し、既に一家を成し尤も行・草に工であつた。太宗の書なる晉祠銘及び先年支那新疆省の敦煌より發見した太宗の書と稱する温泉銘などと彼此對照すれば觀る者は自ら首肯せらるるであらう。洵に逸品であつて支那にも此れ程のものはあるまいと思ふ。温湯・晉祠二碑の拓本は夙に新羅の末葉に將來せられたことは本書概説篇及び聖住寺朗慧和尚葆光塔碑の條に述べた通りである。

碑陰に陰記があり、大師から太祖への奏表を刻してゐるが、中斷せるを以て前後の關係は不明である。興法禪院の文字があり、又在家弟子の姓名を鐫つてある。碑陰の文字は楷書であつて、歐法を體得してゐる。字徑八分書者は詳かでない。

附記

興法寺址には此の碑の龜趺・螭首が存して居り、螭首には「故真空大師碑」なる六字の題額を刻してゐる。舍利塔は先年京城樂園洞の塔洞公園に移したが、更に昭和九年の晩秋に廉巨和尚の舍利塔と共に之を朝鮮總督府博物館

館の後庭に移した。

參照

- 一、海東金石苑卷三。晉高麗國興法寺真空大師忠湛塔碑銘。碑陰記。
- 一、朝鮮古蹟圖譜六。同解説六。
- 一、「朝鮮金石説明」朝鮮總督府月報第四卷第九號。
- 一、朝鮮金石總覽上、一四四頁。
- 一、拙稿「朝鮮金石説明」六六頁。朝鮮史講座。
- 一、鮎貝房之進著。雜攷第四輯上卷。
- 一、關野貞著。朝鮮美術史一六〇・一六六頁。
- 一、書道全集第一二卷。圖版及び釋文解説。

○蓋聞そ「蓋」は發語の語氣詞。『史記』卷八七・李斯列伝、「蓋れ聞けり、聖人は遷徙して常無く、變に就いて時に従い、末を見て本を知り、指を觀て歸を觀る、と」。

○微言び言げん＝仏言のこと。真理を秘めた微妙なる言旨。『出三藏記集』卷一五・道安法師伝、「初め安は羅什の西域に在るを聞き、共に微言を講析せんことを思う。安、堅に勧めて之を取らんとす。什も亦た遠く其の風を聞き、是れ東方の聖人なりと謂い、恆に遙かに之を禮す」(T五五—一〇九a)。

○鷲嶺之譚じゆ＝鷲嶺は靈鷲山のこと。靈山会上における拈華微笑の話を指す。(二)を参照。

○雞山之定けい＝雞山は鷄足山のこと、迦葉が入定したところ。『阿毘達磨大毘婆沙論』卷一三五、「曾て聞けり。尊者の大迦葉波、王舍城に入り、最後に乞食す。食已りて未だ久しからざるに鷄足山に登る。山に三峰有り、鷄足を仰

ぐが如し。尊者中に入り、結跏趺坐し、誠言を作して曰く、願わくば我が此の身并びに納・鉢・杖、久しく住まりて壞れず、乃ち五十七俱胝六十百千歳を経て、慈氏如來の正等覺に應じて世に出現したもう時に至りて、施して佛事を作さんことを、と。此の願を發し已り、尋いで般涅槃す。時に彼の三峰便ち合して一と成り、尊者を掩蔽し、儼然と住す」(T二七—六九八b)。

○慶喜Ⅱ阿難陀Anandaの中国語訳。『景德伝灯録』卷一・阿難章、「第二祖阿難は王舍城の人なり。姓は利帝利。

父は斛文王、實に佛の從弟なり。梵語に阿難陀、此には慶喜と云い、亦た歡喜と云う」(T五一—二〇六b)。

○當仁Ⅱ『論語』衛靈公第十五、「子曰わく、仁に當りては、師にも讓らず」。

○和脩Ⅱ西天の第三祖商那和修のこと。『阿育王伝』卷五、『付法藏因縁伝』卷二に伝がある。禪の祖師としての伝は『宝林伝』卷二、『祖堂集』卷一、『伝灯録』卷一など。舍那婆斯とも音写される。「左溪大師碑」(『全唐文』三三〇)や『歴代法宝記』は同一人物なることに気付かず、西天二十九祖説を立てる。

○圓覺Ⅱ唐の代宗(在位七六—七九)が達磨に贈った諡。『唐文拾遺』卷三一「再建円覚塔誌」、「司徒中書令の汾陽王郭子儀、東京を復するの明年、表を抗げて大師の諡を乞う。代宗皇帝、諡して圓覺と曰う。其の塔を名づけて空觀と曰う」。

○大弘Ⅱ唐の徳宗(在位七七—八〇四)が慧可に贈った諡号。『祖堂集』卷二・慧可章、「徳宗皇帝、大弘禪師大和の塔と諡号す」(『禅学叢書之四』、一一八〇)とあり、白居易撰「西京興善寺伝法堂碑銘并序」(『全唐文』六七八)に、「先那は圓覺達摩に傳え、達摩は大宏可に傳え、可は鏡智璨に傳え、璨は大醫信に傳え、信は圓(一)に大に作る」満忍に傳え、忍は大鑒能に傳う、是れ六祖爲り」とある。

但し『伝灯録』卷三、『天聖広灯録』卷七、『伝法正宗記』卷六、『五灯会元』卷一の慧可章は「大祖禪師」とする。

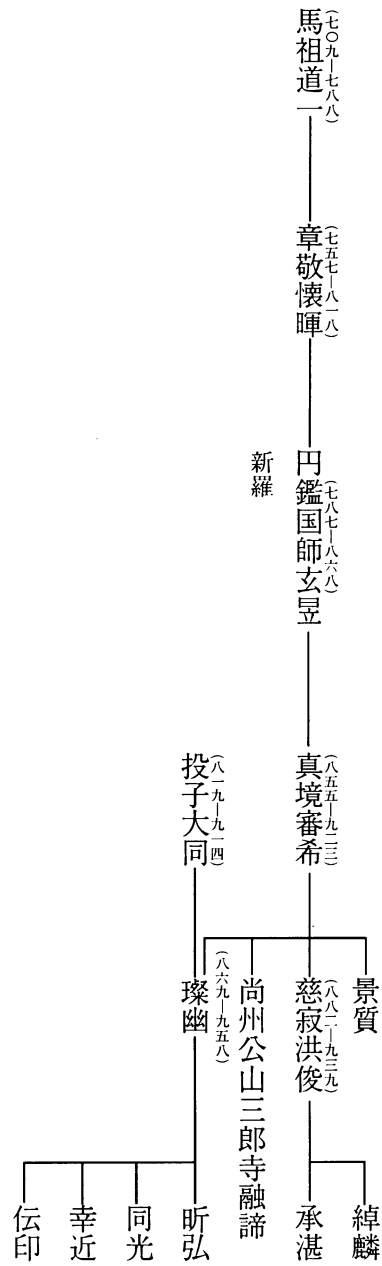
○同風Ⅱ格調、風格が同じ。班孟堅「両都賦序」（『文選』巻二）、「大漢の文章は、炳焉あきらかに三代と同風」。また『雪峰語録』下、「君子は千里同風」。

○祖法Ⅱ祖師の法。『祖堂集』巻九・逍遙章、「垂語して曰く、古時には祖法を傳えしも、如今は祖法を傳えず」（『同』、三一一一）。

○心燈Ⅱ心にともされた悟り（智慧）の灯光。『小室六門』「第一門心経頌」、「心燈は法界を明らむ、即ち此れは是れ菩提なり」（丁四八―三六六）。『祖堂集』巻二・達摩章に引かれる那連耶舎の讖偈十三首の第三首目にいう、「三四は全く我無し」（三四とは七なり。五祖は七歳にして道信大師に遇う。人我無しとは出家なり）。水を隔てて心燈を受く「隔水とは、五祖は新州蘄水郡に於て四祖の心印を傳うを得たり。故に心燈を受くと言う」。尊号は諸量を過ぐ「過量とは弘の字なり」。嗔に逢いて憎を起さず「不起とは忍の字なり」（『同』、一一六七）。『祖庭事苑』巻八「釈名讖弁」では、「心燈とは所傳の法炬なり」（Z一一三―一四d）と説明している。

○一花歛現、六葉重榮Ⅱ菩提達磨の伝法偈、「吾れ本と茲の土に來たり、法を傳えて迷情を救う。一花、五葉を開き、結果自然に成る」を踏まえる。

○鳳林家子章敬曾孫Ⅱ九山禪門の一つである鳳林山鳳林寺派のことで、真境審希（八五五―九二三）の弟子を指す。法系は次の通りである。



玄昱（七八七—八六八、慧目山円鑑国師）。『祖堂集』卷二七・東國慧目山和尚章にいう、「東國慧目山和尚は章敬に嗣ぐ。師の諱は玄昱、姓は金氏、東溟の冠族たり。父の諱は廉均、官は兵部侍郎に至る。妣は朴氏、胎孕の際、夢常に殊なるを得たり。貞元三年（七八七）五月五日を以て誕生す。纔かに童心有るや、便ち佛事を知る。毎に水を汲みて以て魚に供し、常に沙を聚めて塔を爲る。年壯齒に至りて、志出家を願う。既に浮海の囊を持ち、遂に掩泥の髪を落とす。元和三年（八〇八）遂に具戒を受く。長慶四年（八二四）、大唐に入り、大原府に至り、二寺に歴居す。頗だ志已に成り、本國の王子金義宗の奉招して東歸するに隨う。開成二年（八三七）九月十二日を以て、本國の武州會津に達す。南岳の實相に之を安んず。敏哀大王・神武大王・文聖大王・憲安大王、並な師資の敬を執り、臣伏の儀を徵めず。王宮に入る毎に、必ず座を敷きて法を誦さしむ。開成の末（八四〇）より、苒を慧目山の埵に結ぶ。景文大王は、高達寺に居らしめ、奇香妙藥、闕くと聞けば必ず供し、暑の臈と寒の裘、時を待ちて授く。九年（八六八）秋、解夏の始、忽まち門人に告げて曰く、我れ今歳の内に法縁當に盡くべし。你等宜しく無遮大會を設け、以て百巖傳授の恩に報い、吾が志を終らしむべし。十一月十四日、中夜に忽尔として山谷震動し、鳥獸悲鳴す。寺鐘

撃ても響かざること三日。十五日の未だ曙けざるに、遽かに侍者に命じて無常鐘を撞かしめ、席を脇にして終る。享年八十二、僧臘六十」（『禪学叢書之四』、五一九―一〇）。

真境審希（八五五―九三三）。九歳の時、慧目山に往きて円鑑大師に謁す。大師は才能があるのを知り、住むことを許した。咸通九年（八六八）、大師が入寂するとき、審希に、「此の法は西天より東して中国に來たり、一花啓発して六葉敷栄す。歴代相承して断絶せしめず。我は中土に遊び、曾て百巖（章敬が初めて住した地）に事えた。百巖は江西に承嗣し、江西は南嶽に繼いだ。則ち曹溪のあとつきであり、高嶺の元孫である。信衣は伝えずと雖も心印相授し、如來の教を遠嗣し、迦葉の宗を長開す。汝は伝うるに心灯を以つてせよ、吾は付して法信となさん」と言い、目で別れを告げた。審希の悲しみは深く、心で喪に服することねんごろであつた。特に師を失う^{なげき}慟を積んで、実に絶学の憂を増したのであつた。十九歳のとき具足戒を受け、名山を遊訪し、高山に仰止し、絶境を尋ねた。文徳の初年（八八八）から乾寧の末年（八九八）まで松溪に宴坐し、暫らく雪嶽に栖遲した。次に溟州託山寺に駐足し、金海の西に福林があるのを聞き、すぐに山を出て進礼に到つた。進礼城諸軍事の金律熙は迎えて城中に入れ、書齋を造つて居らしめた。孝恭大王は使を遣わして帰依の意を表わし、皆これになつた。審希は西岫の勝景の地に旧墟を見出し、そこに茅舎を剏修して禪宇とし、鳳林と号した。新羅第五十四景明王（在位九一七―九三三）は師資の礼を表し、入殿說法せしめた。この時、師に随つて上殿した者は八十人であつた。龍徳三年（九二三）四月二十四日、衆に告げていう、「諸法は皆な空、萬縁も俱な寂たり。言は其れ世に寄ること宛かも行雲の若し。汝ら勤めて以つて住持せよ。慎んで悲哭することなかれ」と。右脅にして臥して鳳林禪堂に示滅す。俗年七十、僧臘五十。「鳳林寺眞鏡大師寶月凌空塔碑」があり、『海東金石苑』卷二、『朝鮮金石総覧』上に収録されている。

慈寂洪俊（八八二―九三九）。諱は洪俊、俗姓金氏。其の先は辰韓の茂族にして兎郡の名家なり。中和二年（八八二）

三月十四日誕生す。真鏡大師に師事し、敬恭を尽し、禪林の宝を獲る。東泉寺、龜山禪院に住持し、天福四年（九三九）一〇月一日龜山の法室にて入寂す。俗年五十八、僧夏四十六。「境清禪院慈寂禪師凌雲塔碑并序」があり、『朝鮮金石総覧』補遺に録される。

璨幽（八六九—九五八）。「廣州慧目山高達寺元宗大師慧眞塔碑并序」があり、『朝鮮金石総覧』上に収録されている。忽滑谷快天『朝鮮禪教史』に、この碑文の略による伝記があるので、それを次に転載する。

璨幽、字は道光、俗姓は金氏、鷄林河南の人なり。唐の懿宗咸通十年を以て生る。年甫めて十三にして出家、尚州（慶尚北道）公山三郎寺の融諦に謁す。諦は眞鏡大師審希の嗣。諦その法器なるを知りて、慧目山の審希に師事せしむ。便ち慧目に詣りて、妙理を精究し、玄機を高悟し、年二十二に及んで楊州（京畿道）三角山莊義寺に受具す。既にして審希は光州（全羅南道）松溪禪院に移住したるを以て、特に松溪に至りて拜謁す。希云く、白雲は千里萬里なるも、猶お是れ雲に同じ、明月は前溪後溪にも、嘗て異月無し、爰に識に因りて識るも、只だ心に在るは心而已。是に於て遠遊の志を立て、昭宗景福元年（新羅眞聖王五年）商舶に乗じて入唐し、舒州桐城縣に投子山大同に參ず。大同は翠微無學の嗣、無學は丹霞天然の嗣にして石頭希遷の孫なり。便ち微言を舌底に悟り、眞佛を身中に認む。將に辭せんとするとき、投子云く、遠きに去る莫れ、近きに去る莫れ。幽云く、遠近に非ざると雖然も、要且停留せず。投子云く、既に心に傳うを驗せり、何ぞ目語を須いん。それより諸山に名刹を訪ひ、適々本國の歸船に値ふて、後梁龍德元年（太祖四年）、康州（慶尚南道晉州郡）徳安浦に達す。逕ちに鳳林（慶尚南道昌原郡）に詣りて眞鏡（審希）に歸觀す。鏡喜んで三郎寺に住せしむ。居ること三冬、出て京輦に詣りて太祖に入覲す。太祖請して慶州天王寺に住せしむ。而も慧目山の幽勝を愛して移りて之に住す。是に於て問津の者雲集し、一大禪林をなす。未だ幾もなくして太祖薨じて、第二惠宗即位す。王亦佛法を敬信し、幽に茗薛並びに紋羅法衣

を賜ふ。惠宗薨じて第三定宗踐祚し、袈裟法衣を贈る。定宗薨じて第四光宗の代に泊んで、號を賜ふて證眞大師と爲し、迎へて王城の舍那院に入らしめ、越えて三日、重光殿に於て法筵を開き、即ち服冕を以て奉じて國師となし、銀瓶銀香爐、金釵盜鉢、水精念珠、法衣等を賜ふ。また天德殿に於て法筵を設け、陞座說法せしむ。僧あり問ふ、如何なるか是れ向上一路。幽云く、千聖に従いて得ず。又問ふ、既に千聖に従いて得ざれば、從上の相傳は、何よりして有り。對て云く、只だ千聖に従いて得ざるが爲に、所以に従上相傳す。又問ふ、與麼ならば即ち二祖は西天を望まず、達磨は唐土に到らず。對て云く、千聖より得ざると雖も、達磨は虚しく過來せず。それより宮闕を辭して歸休せんことを乞ふ。王、誦（講）徳詩を製し、幽に寄せて云く、慧目高懸耀海郷、眞身寂寂現和光、貝中演法開迷路、鉢裏生蓮入定場、一喝成音收霧淨、二門離相出塵涼、玄關遠隔山川外、恨不奔波謁上房。後晉の世宗顯徳五年（光宗王九年・西紀九五八年）將に化せんとして衆に示して云く、萬法皆な空、吾れ將に往かん、一心を本と爲し、汝等勉旃せよ、心生れば法生じ、心滅すれば法滅す、仁心即ち佛なれば、寧ぞ種有らん、如來の正戒、其れ之を護り之を勗む。言ひ畢りて儼然として坐化す。年九十なり。光宗、元宗大師と追諡す。弟子昕弘、同光、幸近、傳印等五百餘人あり。

○世宗之遇摩騰摩騰は『四十二章經』を訳したとされる撰摩騰（迦葉摩騰・竺葉摩騰）のこと。後漢の孝明帝が金人を夢見て、西域に仏法を尋ねさせたところ、摩騰が漢地に来る。明帝は白馬寺を建てておらしめた。『梁高僧伝』卷一の撰摩騰章に見える。従つて摩騰と関係のある皇帝は、孝明帝であり、その廟号は顯宗である。因に漢武帝の廟号は世宗であり、後漢の光武帝のそれは世祖である。碑文を選した高麗太祖のミスとして、仮りに顯宗孝明帝のこととして訳しておいた。真静国師『湖山録』に収める「答芸台亞監閔昊書」では、「夫れ莊帝の始めて夢みるに速んで、摩騰初めて釋典を儀よくし、肇めて洛陽の白馬寺を興す」（『韓国仏教全書』第六冊、二二三上）とあり、莊帝

とされている。待考。

○梁武之逢寶誌 寶誌は四一八—五一四。宝志、保志とも。俗姓は朱、金城（江蘇省江寧）の人。幼くして出家し、金陵の道林寺で禅業を修した。宋の泰始の初め（四六五）頃より、鍾山に出入し、宋末・齐初（四七九）の頃より奇行・神異が始まり、齐の武帝は衆を惑わすとして獄に入れたが、梁の武帝は、「誌公、迹は塵垢に拘わるも、神は冥寂に遊ぶ。水火も焦き濡ぬらすこと能わず、蛇虎も侵懼すること能わず。其れ仏理を語れば則ち声聞以上、其れ隠淪を談れば則ち遁仙高き者なり。豈に俗士の常情を以て空しく相い拘制せんや」と詔して、その禁を解き、教えを請うた。宝誌の撰とされる「大乘讚」十首、「十二時頌」「十四科頌」が『伝灯録』卷二九に収録されている。天監一三年冬、華林園の仏堂で入寂した。世寿は九十七。『宝林伝』卷八、『祖堂集』卷二の達摩章では、達磨が機縁契わずに魏に去った後、武帝に「この人は仏心印を伝える観音大士だ」と教えている。伝記については、陸倕（四七〇—五二六）撰「誌法師墓誌銘」（『芸文類聚』卷七七）、『金陵梵刹志』卷三）、『高僧伝』卷一〇が第一資料である。禅宗側の資料としては『伝灯録』卷二七、『聯灯会要』卷二九、『五灯会元』卷二、『指月録』卷二がある。牧田諦亮「宝誌和尚伝攷」（『東方学報』二六冊、一九五六年、後に『中国仏教史研究第二』に収められる）がある。梁武帝については「五三」の注を見よ。

○典拠について Ⅱ「海東興法寺碑」、即ち「高麗興法寺真空大師忠湛塔碑」と明記されている。『海東金石苑』卷三、『全唐文』一〇〇〇、『朝鮮金石総覧』に収められているが、碑石は断片だけが残っており、欠損が多く通読できない。今、一番よくまとまっている全唐文のものをベースにし、他の二資料も参考にして、六十二則の文を加えて見ると次のようになる。

蓋聞微言立教。始開鷲嶺之譚。妙旨傳心。終入雞山之定。雖曰別行法眼。竊惟同稟玄精。慶喜於是當仁。和脩以

其嗣位。至於馬鳴繼美。垂妙法於三乘。龍樹揚芳。見其□□□□相離相非身是身降及(闕)初聞圓覺。東入梁朝。始見大弘^①。北遊魏室。於是師資所契。付囑同風。祖法相承。心燈不絕。所以一花歛現。六葉重榮。近自江西。流於海裔。亦有鳳林家子。章敬曾孫。惟我大師。再揚吾道者焉。大師法號忠湛。俗姓金氏。其先雞林冠族。免郡宗枝。□□島以分榮託桑津而別派遠祖多(闕)陶潛而不事王侯。希賈詡而寧求祿位。所以考槃樂道。早攻莊列之書。招隱攀吟。常避市朝之譽。母(闕)賢之子。豈無修聖善之心。感此靈奇。求生法胤^⑤。以咸通十年八月一日誕生。大師生有殊相。弱無戲言。(闕)性靈超衆。神悟絕倫。槐市橫經。杏園命筆。二親嘗邀相者。相之云。若至甘羅之歲。鳳舉難量。終臻賈誼之(闕)至失於怙恃。惟恨栖遑。爰有長純禪師。是導師。修度世之緣。當亡父結空門之友。大師隨其長老。得居(闕)俗塵。方登僧位。尋令昇堂觀奧。入室鉤深。迅足駸駸。後發先至。覺枝脉脉。前開晚成。所以偃仰禪林。優游(闕)認印度重光。終至相傳。窺楞伽再闡。迺於龍紀元年。受具戒於武州靈神寺。既而習其相部。精究毘尼^⑬。捧(闕)宗論道。謂學人曰。淺溜穿石。同心斷金。鑽燧之勤。寫瓶之易。皆由積微不已。跬步邁征。俄成學海之功。永就(闕)釋子天日。禪僧此間觀曝骨之墟。見殭屍之處。他山靜境。豈無避地之方。此地危邦。終絕居山之計。□□□□華(闕)者。同載而征。達於彼岸。此時徑登雲蓋禪宇。虔禮淨圓大師。大師是棲雲壑之居。佩石霜之印。知大師遠離(闕)圖南迴奮。垂雲之翼。豫章向上。高揮拂日之枝。大師謂曰。汝還認其到此階梯。預呈其遷喬□□□□所以不離寶所(闕)河東參禪門於紫嶽。故能初窺聖典。久棲禹穴之旁。始覽靈蹤。方到燕臺之畔。迺於天祐□□年六月中。得達於(闕)學俱於問訊。慶忭交深。數月論禪。周年問法。惟彌天發□□及離日搖脣量語路之端。酌言□□之□此日揣於兩地。心(闕)之光。愁見甲兵之色。所以便辭金海。遙指玉京。行道遲遲。於焉入境。不惟摩勒重敷。兼亦優曇一現。奉迎內殿。尋以(闕)遙屢吐象王之說。重重避席。恭披弟子之儀。一一書紳。結以王師之禮。翌日請移□□□□□□□□□□之水淨精廬永元(闕)術^⑳。大師遠從丹慊。再到京

畿。所以別飾玉堂。令昇繩榻。問大師曰。寡人少尚威武。未精學□。不曉先王之典。寧(闕)存亡之志所喜不勞漢夢仍觀秦星。世宗之遇摩騰。梁武之逢寶誌。無以加也。生生世世。永修香火之因。子子孫孫。終表奉持之至。所以重起其興法禪院。以住寺。(闕)吉祥之地。尚論往美。更知延福之庭。志有終焉。心無悔矣。然則遂於此地。高敞禪局。□□如雲。學人如霧。依舊瑠璃(闕)聞興法之談。不受大師之誨者。處處精舍。其徒擯之。終日了無語言。一宵堅不留宿。豈期大師素無疾疹。富有(闕)五年七月十八日詰旦。告門人曰。萬法皆空。吾將去矣。一心爲本。汝等勉旃。顏貌如常。寂然坐□。俗年七十有二。僧(闕)悲盈四部。天人增絕學之哀。寧惟慟徹。諸方士庶。泣亡師之痛。寡人忽聆遷化。尤慟於懷。追切洪德。不能已已。特(闕)萬壽之遐長。乖羣情之敬仰。今則果雖核矣。室可修焉。然則先忻於水積魚歸。後恨於林傾鳥散。所冀早儀明禮正。當(闕)之塔。惟大師雪山成道。煙洞證心。傳十八代之祖宗。統三千年之禪教。則知澗洽浮世。舉其廣則誰曰黃輿周。(闕)忘機仍引。狎鷗之興。幾多舛蠶。無限昭彰。可謂闡揚身毒之風。敷演竺乾之法者矣。門徒弟子五百(闕)成田。陳情而特請龜文。瀝懇而頻干鳳德。所冀顯無爲之化。留在水雲。期不朽之緣。刻於金石。(闕)之心。歸美百臺。旌國士追攀之志。乃爲銘曰。(闕)蘇認已。藏寶知印。慈航沒浪。慧炬沈光。銀燈石塔。

—線は〔六二〕則の文、—線は欠損を補えた所。

- ①弘〓宏(海) (全) ②槃〓盤(総) ③莊列〓□□(総) ④賢〓□□(総) ⑤胤〓允(全)
- ⑥八月〓正□(総) ⑦之〓□□(総) ⑧之〓□□(総) ⑨惟〓唯(総) ⑩當〓□□(総) ⑪居〓□□(総)
- ⑫戒〓十(捧) (海) ⑬尼捧〓□□(総)、[捧]—(海) ⑭宗〓□□(総)、 ⑮永就〓□□(総)
- ⑯釋〓□□(総) ⑰天日〓參日(総)、忝日(海) ⑱華〓□□(総) ⑲棲〓栖(総)、樓(海)
- ⑳霜〓□□(総) ㉑知大師遠〓□□□□□□(総) ㉒高〓□□(総) ㉓其遷喬〓□□所不離寶所〓□遷□□□

- 離寶□(総) ②4棲||栖(総) ②5十□年六月中||□□□□□□□□(総)、□□年六月中(海) ②6於||
 于(総) (海) ②7忤||抃(総) ②8□□及||□□乃(総)、□□及(海) ②9言□之□||□□□□(総) ③0於||
 □(総) (海) ③1惟||唯(総) ③2亦優曇一現||□□□□□□(総) ③3象||衆(総) ③4結||待(総)、
 [結]—(海) ③5移□□□□□□□□□□□□□□□□(総) ③6永元||□□□□(総) ③7術||□□□□(総)
 ③8慊||幪(海) ③9威武未精學□□□□□□□□□□□□□□□□(総) ④0永修香火之因||□□□□□□□□□□(総)
 ④1□□如雲學人如霧依||□□□□□□□□□□□□□□□□(総) ④2語||與(総)、与(海) ④3豈期大師素無疾||□□□□
 □□□□□□□□(総) ④4然坐□□俗年||□□□□□□□□□□□□□□□□(総) ④5切洪德不能已||□□□□□□□□□□□□□□□□(総) ④6萬||□
 (総) ④7果||梁(総) ④8於||于(海) ④9於||于(海) ⑤0冀早儀明||□□□□□□□□□□(総) ⑤1當||□□□□□□□□(総)
 ⑤2則誰曰黃輿周||□□□□□□□□□□□□□□□□(総) ⑤3肸||盼(総) ⑤4[可]—(総) ⑤5(□) +期(海) ⑤6刻於
 金石||□□□□□□□□(総) ⑤7百||栢(総) ⑤8蘇||□□□□□□□□□□(総)、珠(海) ⑤9燈||鐙(海) ⑥0[塔]—(全)

(総)は『朝鮮金石総覧』、(海)は『海東金石苑』、(全)は『全唐文』。

「因窺五百禪院」は碑文のどこに入るのか不明。あるいは、これだけ宝蔵録の撰者が加えたものであるかもしれない。